

特115

780



始





特715

780

本部朝基著

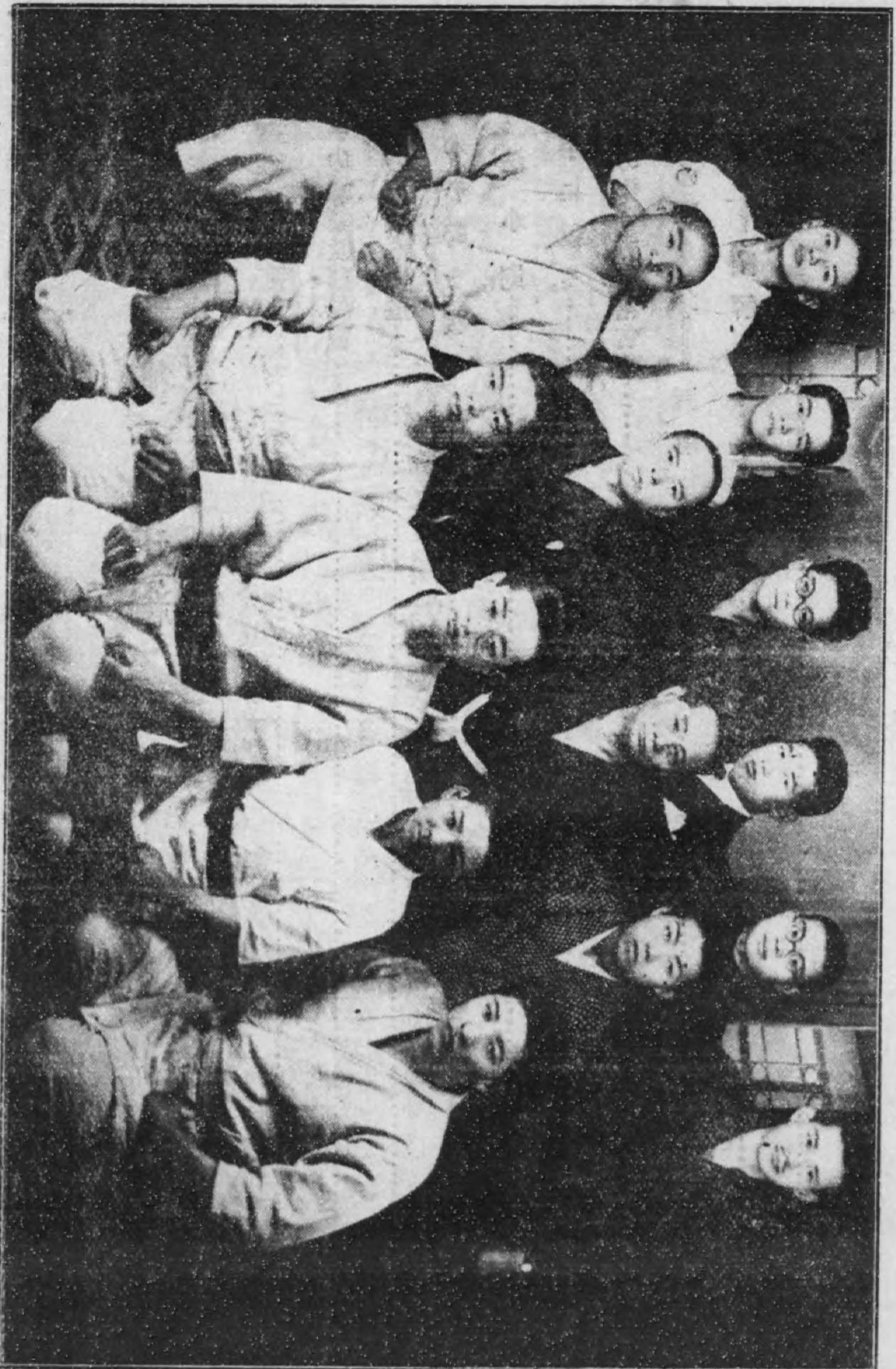
繩衝  
拳法

唐  
手  
術  
組  
手  
編

唐手術普及會發行



特115  
780



右よりの上段 11 松村君、柔道三段 林君、田中君、原君、石井君、小畑君、中段  
助教 師山田君、著者本部 會長、幹事 長杉本得二君、柔術師 範上島君、下段 11  
中島君、飯田君、岩井君、深江君



沖繩 唐手術(組手編)

目次

自序.....一

唐手の意義及び起源.....四

唐手の種類と變遷.....五

基本姿勢と腰.....七

拳法 小則.....七

組手に就て.....一

巻藁の作り方と稽古.....三

巻藁の突き方——圖解.....一六

組手——圖解.....一〇

心得となるべき治療法——蘇生術.....三

自序

大正十二年の春だつたと思ふ。私は四貫島で柔道の教師土井  
 さいふ人に紹介されたことがある。氏は當時大阪を中心に關西  
 方面の學校、警察、各工場等に關係されて可なり、其名も知ら  
 れてゐたが、談偶々沖繩の唐手に及ぶと「そんな重寶な武術在  
 ありますか、恚んな文化的武術を沖繩だけで占領するのは國家  
 の損だ。吾々が極力援助するから是非之れを全國に弘めて呉  
 れ」或る日の如きは氏に伴はれて遙々兵庫の御影師範と御影  
 警察署迄出掛けて唐手の効果を實地に試演したことがある。

土井氏は其後屢々余の蹶起を促して呉れた一人だが何しろ  
 私としては上阪まだ間もないことではあり、且つ沖繩の唐手が

15.10.21  
 内交



縣外に何の程度まで理解されてゐるやら其邊の消息も判らないので遂にそれ限り沙汰止みになつた。

富名腰君が東京で初めて唐手の指南宣傳を行つたのも恰度その頃だつたと思ふが、まだ世人の記憶に新たなる如く我が唐手術なるものは大正十年三月畏くも

東宮殿下の臺覽を辱うし、近くは又昨年五月に、秋父宮殿下御渡英の途次にも臺覽の光榮に浴したところがあるので、爾來唐手が一躍全國民の視線を惹くやうになつた。

斯くの如く私は將に斷絶しやうとした琉球特有の唐手が再び光明の世界に擡頭し來たのを衷心から祝福すると共に、從來前後幾度もなく指導を懇望し來られた諸君の熱誠に最早や凡ゆる辭退の理由がたゞなくなつて茲に愈々組手編なる一書を

上梓すべく余儀なくされた。乍去何をいふても淺學菲才の而も微力なる私が之れに關する先輩武人の遺書なきのみならず、參考として何一つ便るべき記録がなく、各方面から各種の質問が殺到し、なほ其の詳細なる説明を求め向も頗る多く、殆ど應接に違ない有様で、是等の懇請黙し難く、不取敢唐手術の中軸とも云ふべき組手を自分が過去に於て學び得た經驗、古老の記憶、傳説を經緯として茲に編纂する事に致しました。叙上、書き漏した事も少くないと思ひますから、近々發刊の基本編に於て更に増補訂正を加へて、不備缺陷を補ひ貴意を得たいと思ひます。

大正十五年五月

著者 本部朝基識



## 唐手の意義及び起源

琉球の拳法、唐手即ち空手とは如何なるものか？

今日こそ新聞紙上又は雜誌にて公表せられ、或は當大阪を初め東京其他二三の都市に於て、その實技を公開せられて以來、柔術家は勿論其他にも廣く研究せらるゝ様になりましたけれども、その以前は唐手術が何であるかを解し得る人は、殆んぞ皆無であつたに云つても、決して過言ではない。

琉球即ち沖縄縣に於ては、古來一種特別な武術があつて、廣く縣下に普及せられたものである。これ拳闘術に似て拳闘術に非ず、又柔術にも非ずして、實に沖縄獨特の武術即ち唐手術なるものである。

一度斯術を學び得た者は、心身の鍛鍊を全ふし、單身如何なる大事に向ふも動せず、徒手空拳克く敵を挫き、身を護ることが出来る。

然らばこの唐手術なるものは、いつ頃から行はれたか云ふに、いくつもの説があるが、先づ琉球は古來より支那と交通し來たつた故、支那人より斯術の傳授を受け一般に廣く傳へたものであつて、所謂唐手術なるものは太古より傳統的に傳はつたものである。

## 唐手の種類と變遷

唐手はその種類多く、中には忘れられたものもあれば、又現在行はれないものもあつて、その發達も實に複雑である。世の變遷と共に唐手にもよく流行せる手と流行しない手が出来るに云ふ風で、その時代により或は場所によつて、その用ひられし手が自ら異なるものである。



先づ古來より琉球に行はれたのは、サンチン、五十四歩、セーサン、セーユンチン、一百零八、ナイハンチ(二段)、バツサイ(大)(小)、チントー、チンテー、ワンシユー、ローハイ及び公相君で、尤も廣く一般に知られたものはナイハンチ、バツサイ、公相君の三種である。

而も琉球の拳法、唐手は古來支那から傳來せる事は既に述べた通りであるが、サンチン、五十四歩、セーサン、セーユンチン、一百零八は支那でよく用ひられ、現在なほ存在せるも、ナイハンチ、バツサイ、チントー、チンテー、ワンシユー、ローハイ及び公相君は今日では本尊の支那では見るこゝさへ出來ず、只沖繩に於てのみ用ひられてゐるのである。

尙ほ廢藩前迄はワンシユー、ローハイの二種は泊に於てのみ行はれ、首里、那覇ではこれを稽古する人さななかつたが、廢藩後漸く首里、那覇でよくこれを教へるこゝさなり、平安の如きは近代の武人糸洲氏がその子弟の教材に資せんため創案せられたものである。

## 基本姿勢と腰

唐手の練習上常に心掛くべきは、その基本姿勢ミカの入れ方、腰の据ゑ方である。

基本姿勢は何れの場合も雖も八文字立で、八字形に爪先を開き兩手を自然のまゝに垂れ、足と足との間隔は人に依つて多少の差異はあるけれども、二尺位を基準としたらよい。

又力のいれ方は兎に角、腰を据ゑ下腹にウンミカをいれる様、常に心掛くべきである。

## 拳法小則

一、唐手の稽古は十二歩を初期として稽古をせばいちじるしく發達をなし、且つ組織的にもよく訓練さるゝ便利がある。されど唐手の稽古はやる氣さへあれば、いつ何時からでも出來



るから、稽古をやりかけたら終身持續してやらねばならぬ。

一、唐手の稽古に志し、又は研究中の者は常に力の弱い方に力を盡し、稽古の時も左の手を多く役立たす様に心掛け、朝夕二回の稽古の時も必ず、出来るだけ左の手の力を増進せしめる様に活達に働かさねばならぬ。

一、唐手の稽古をなし、且つ又武を練らんご欲する人は、常に起床の時も床の上で坐り直つたまゝ、丹田にウンミカをいれ、兩三回左右の両手を交互に平面、或は前後左右に動かし、二本の手の發育に資するやう力めねばならぬ。

一、いやしくも唐手の修業をなす人は、その基本姿勢、八文字立を忘れない様に、稽古の時に限らず胸を出来るだけ張り、下腹にウンミカをいれて姿勢を正し、決してその姿勢をくづさぬ様注意せねばならぬ。昔から唐手の稽古をよくせる人は、普通の人より何れも體格が立派

で、頑健であるのは毎に稽古の時、胸を張り力を丹田に而も姿勢をくづさぬ結果、それが習慣性となり次第に身體が打てば鳴る様に鍛へ上げられて、頑丈さを増して來た譯で決しておろそかにすべきでない。

一、唐手修業者にして往々稽古場の狹隘を云々する者があるが不心得も甚だしい。いやしくも武の一字を體してゐる人は、常に稽古といふ事を忘れざるやうに心掛けねばならぬ。精神に實際的習練さは、恰も車の兩輪の如く常につきもので、武といふ精神さへある人なら毎日朝夕二回、たごひ一間角の樹の中でも如何やうにも稽古は出来るから、缺かさず習練する様心掛けねばならぬ。それは普通の人毎朝起床と共に洗面をなすと同じく、唐手習練者の必須條件で、是非朝夕二回、復習といふ意味に於ても、常習的に試みるがよい。

一、唐手の修業者が血氣に逸り、或は身を護らずに之れを亂用し、弱者いじめをなすのではな



からうかご、老婆心から氣苦勞する人もあるが、決して修業者は唐手を稽古する以上、常に武さいふ一字を體し謙讓克己の精神で終始して、武の觀念を寸時でも念頭から忘れぬ様、常に心掛けねばならぬ。若しこの觀念を忘れるやうな事があつたなら、ソレこそ將來それが武人として名をなしても武士としては風上におけず、所謂常人が三度の御飯の時、肝腎の箸を忘れるも同然で間抜けも甚だしいといはねばならぬ。だから唐手修業者は絶えず武の一字を念頭より離さざるやう、心掛けねばならぬ。

一、唐手は又精神修養の一資料として實に有意義な世界的武術で、唐手を稽古した人は精神の統一鍛錬が恐ろしい程發達してゐる。その一例として、唐手の稽古をつんだ人はよく實戦の時、相手の人さ單に立對つただけで、相手がさういふ風に進んで來るさか、又は右の手或は左の手を眞先に突き出すさいふ事をよく見抜くこゝが出来来る。それは恰も藤八拳をよくす

る人が、相手の手を見極める如く百發百中よく見透すのであるから、稽古者は常に此の點に留意し、決して稽古の時に他の事を考へてボンヤリしたりなぞせず、絶えず要心を怠らぬ様心掛けるのが肝要である。

## 組 手 に 就 て

琉球の拳法唐手は基本に組手の二ツに類つこゝが出来来る、基本は唐手の基をなすものにして俗に型と稱へ初心者にもこれをよく教へるのであるが組手は柔道に於けるキメの型にやゝ似て一齣つつ連続的になつて居り手を組むさいふ語源から轉訛して組手と稱するやうになつたものと思はれる。尤も組手は琉球に於ては古來より行はれたのであるが未だ制定した型さいふものはなく尙ほ文献にも残つてゐないのである。そして組手に對する参考書と稱するものもその



多くは支那の武人が編成したものを書寫して武人仲間に珍重がられたもので琉球獨特の組手は實に未だ編成されてゐないのである。前組手は前にも述べた通り手を組むといふ意味が輕訛したもので一通り基本の教習を卒へた人が互に受けはづしを試みて、それが組手と稱さるゝ様になるのであるが元來が唐手は剛柔であるため其の技が未だ充分でない人には試みるこゝすら危険が伴ふため自こ技が上達するに従つて組手といふのも相手を選びて稽古するこゝが出来るので琉球の組手はかくして傳統的に傳へられたものである。そのため人に依つて色々變化をすゝるものであつて決して制定した組手の型といふものはないのである。

されば組手を稽古せんとする人は常に敏捷を旨として相手を選びよく「受けはづす」こゝを稽古すれば自こ組手の稽古をしたといふこゝになるから自らの技の上達を期するのが尤も肝要なこゝであらふと思はれる。

## 卷藁の作り方と稽古

唐手修業者の必備品の中に卷わらこいふ稽古用具がある。卷藁には提卷藁と立卷藁の二通りあるが、普通立卷藁の事を單に「マキワラ」と稱し使用者も多いが、提卷藁は立卷藁のやうに常に使用されず且つ使用する人も少ないのである。

今その作り方を詳述せば、提卷藁は十束位の藁の中に五十斤程の砂をいれ、長サ一尺五寸の四尺廻りにして、更に繩で固く巻きつけ、それを兩端より提繩を掛け、上に吊して突くやうになつてゐる。立卷藁は藁で平紐を作りわらに巻きつけ、長サ一尺、幅三寸五分程の所謂「まきわらし」をこさね、これを卷藁木にクビリ付けて突くこゝになつてゐるが、其の大きさは普通左の通りになつてゐる。



一、全長七尺（地上四尺五寸、地下二尺五寸）

一、幅三寸五分

一、厚サ上端五分、下端二寸五分

又立巻藁の一種で重に兩腕の發育に資する「まきわら」といふ稽古用具もあるが、餘り一般には用ひられざるも特に参考のため詳述しておく。

この巻藁は巻藁木を圓くし、直徑三寸程の長サ七尺のものを地上四尺五寸、地下二尺五寸の割にて地中に動かぬやうに埋め、厚サ一寸以上にして長サ一尺位の「まきわら」で固くまきつけて、兩腕を正面或は側面より打ちかけ筋骨の發達に資するこゝが出来た様になつてゐる。尙ほ巻藁の突き方は、胸を出来るだけ張り兩手を交互に動かすこゝは提巻藁も立巻藁も同じ事では提巻藁は主に足の稽古をなすに用ひ、踵及び土踏ますこゝ足指の中間、指先の三方の練習をな

すこゝを忘れてはならぬ。尤も提巻藁は作方が、上下に振動が自由に出来るやうになつてゐるから、昔から足や手、或は臂裏をもつて便宜に突いたり又は打ちかけて筋骨の發育に資したものである。

茲に一番注意すべきこゝは巻藁の稽古の時、突きの手が八分の力でいく時は、引く力は十分の力を必ず出して稽古すべきである。又稽古は左から始めるのが至當である。何故なれば何人も左は右より力量において劣るものであるから、先づ右を二十回突く時は左は三十回、右を三十回突く時は左は四十回といふ調子で朝夕缺かさず稽古する様心掛けねばならぬ。

夫れ禍患は怠慢より生し、災殃は輕忽より發す、即ち禍を未萌に禦ぎ憂を未然に過むるは、武道達練の士にして始めて、之を善くせん

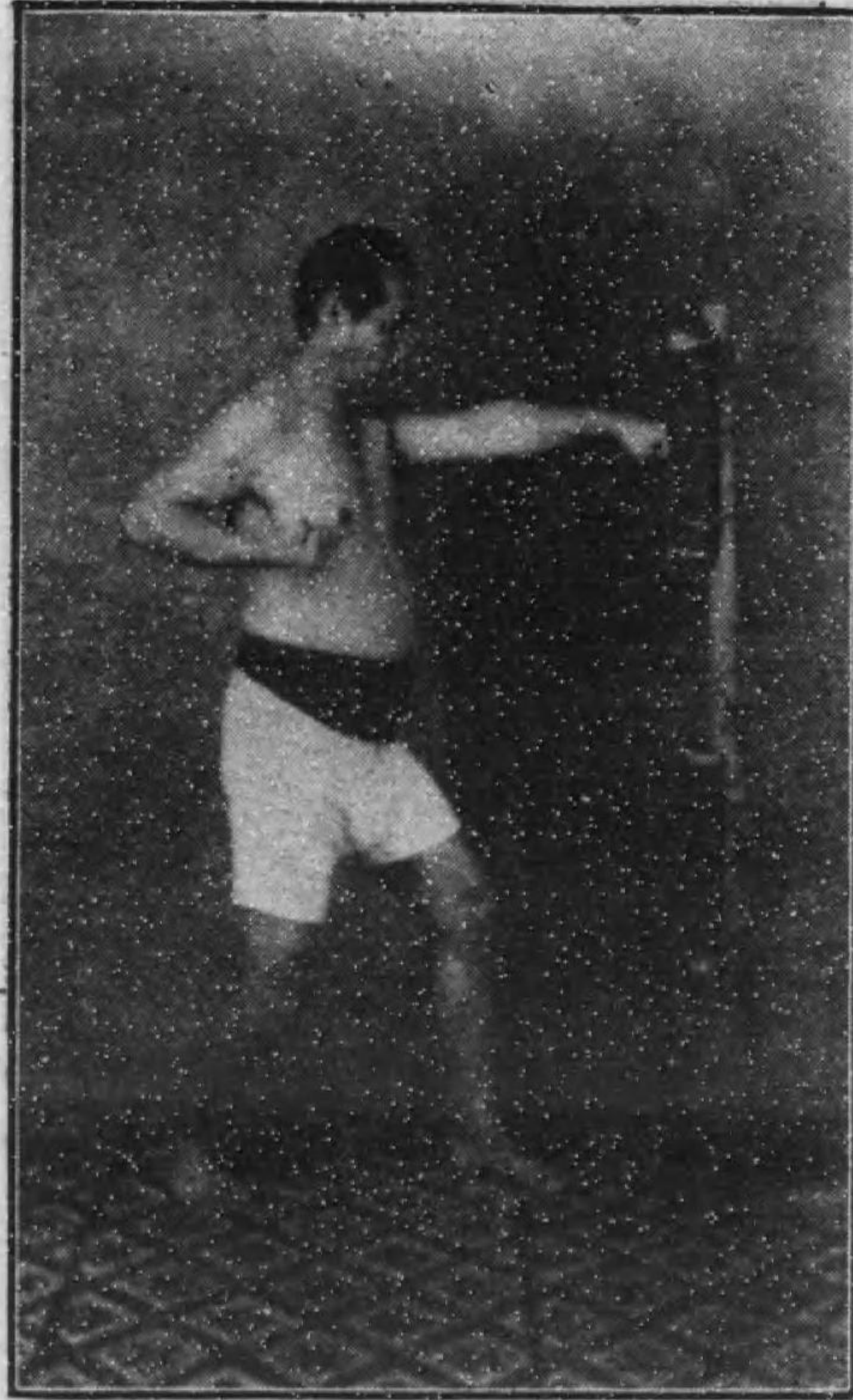


(一其) 方突の薬巻 圖一第



卷薬の前方約一步の所に左足をおき、右足を圖の如く引きて腰を据へ、先づ右拳より始める時は左拳を前方に下げ右拳を乳房横少し下より突き出す。同時に左拳は左乳房横少し下の所に強く引き構へるものゝ知るべし。此場合右拳は乳房と薬の約中間の所迄来る時拳掌部を下へ向け拳の第二掌骨同指骨關節部及び第三掌骨同指骨關節部を以て突くべし。

(二其) 方突の薬巻 圖二第



左拳を突く場合にして突いた右拳を引くと同時に第一圖に於ける右拳同様に左拳にて突き込む。此場合左拳は敵の右拳が我顔面へ来るを打ち外すと同時に敵の顔面へ突き込む心得にて突くべし。



(三其) 方突の薬巻 圖三第

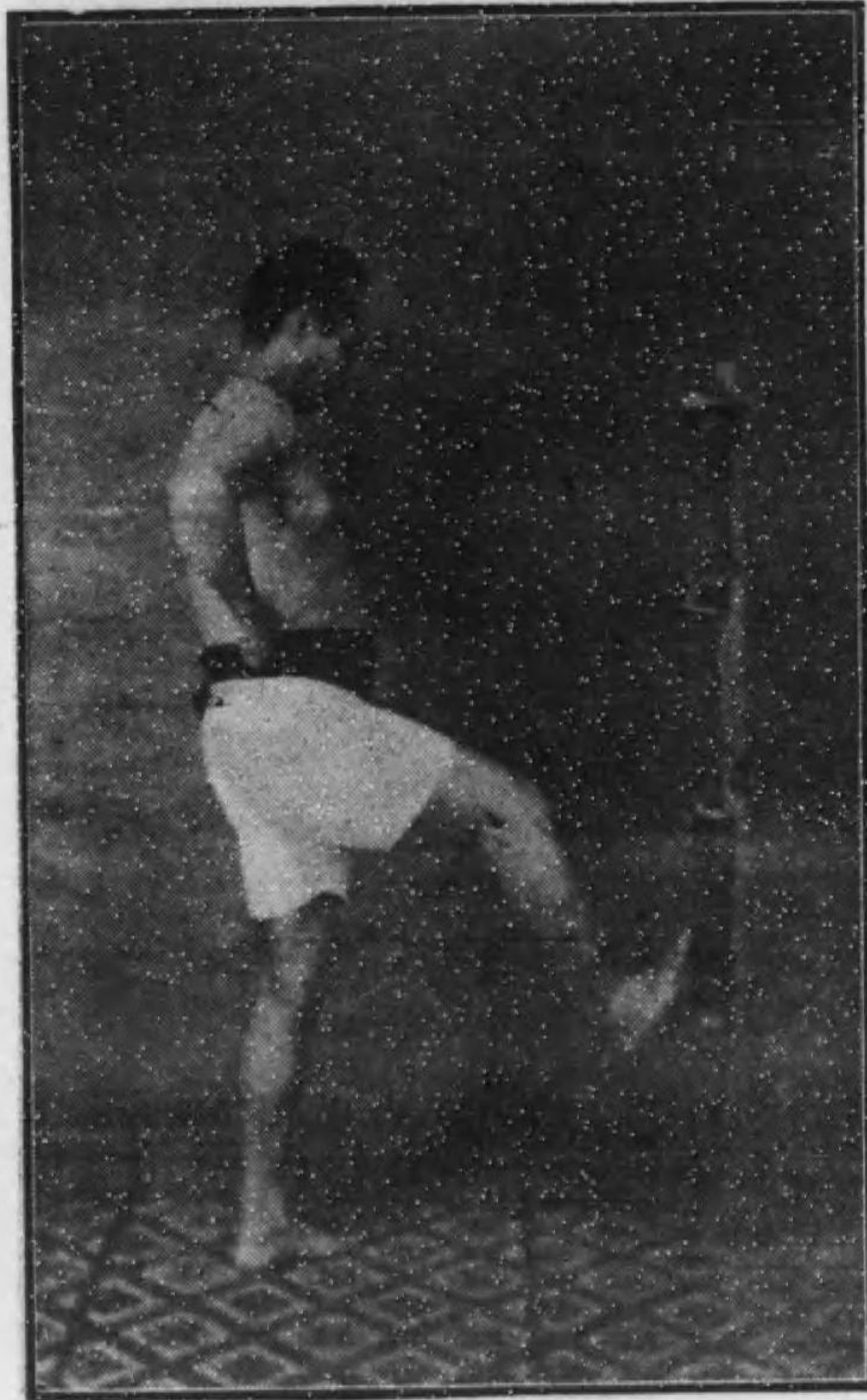


一本巻にて突く場合に

して、動作、構へ等は凡

て第一圖の場合と同じ。

(四其) 方突の薬巻 圖四第



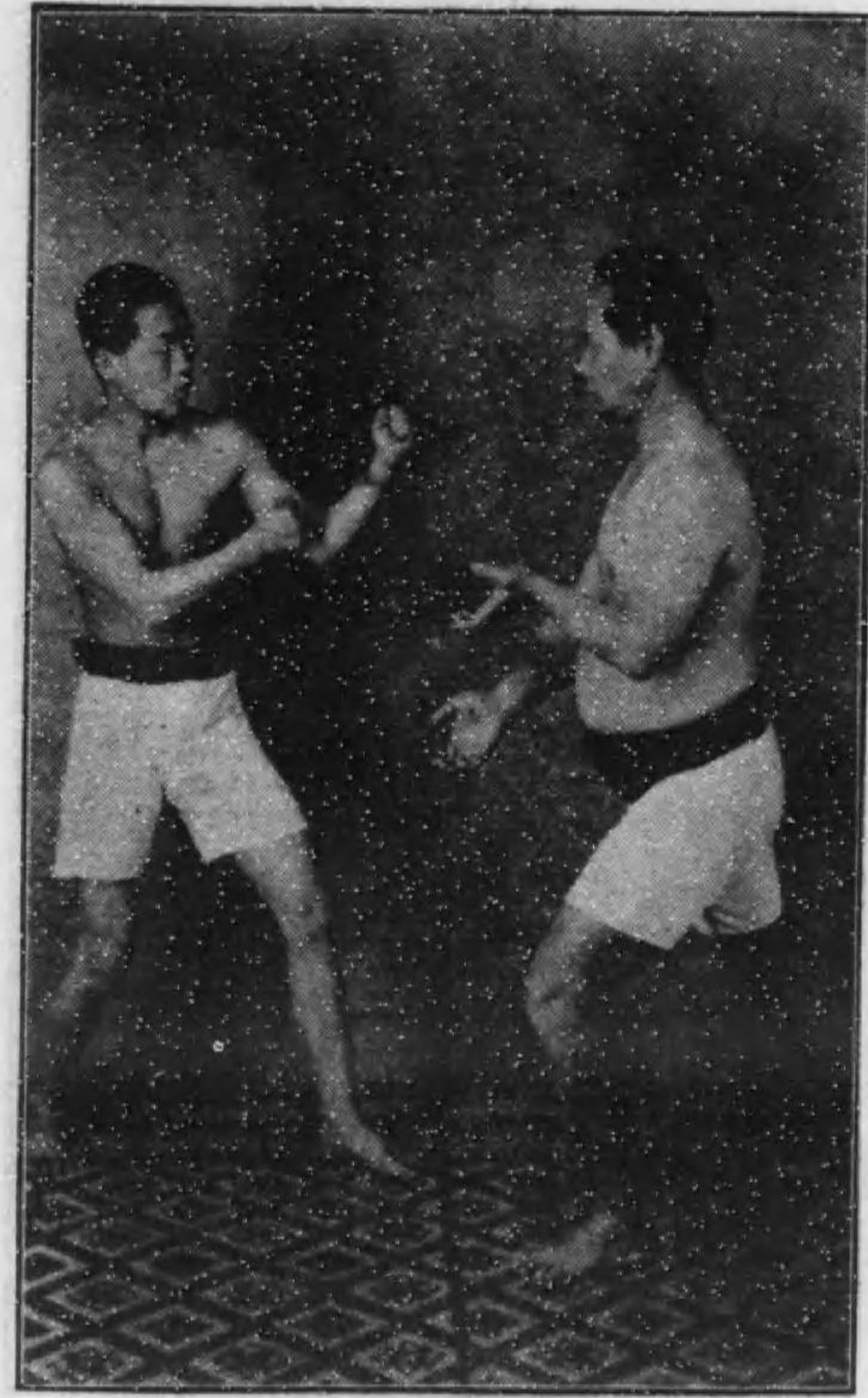
足にて突く場合にして

充分打ち伸ばすべきもの

なり



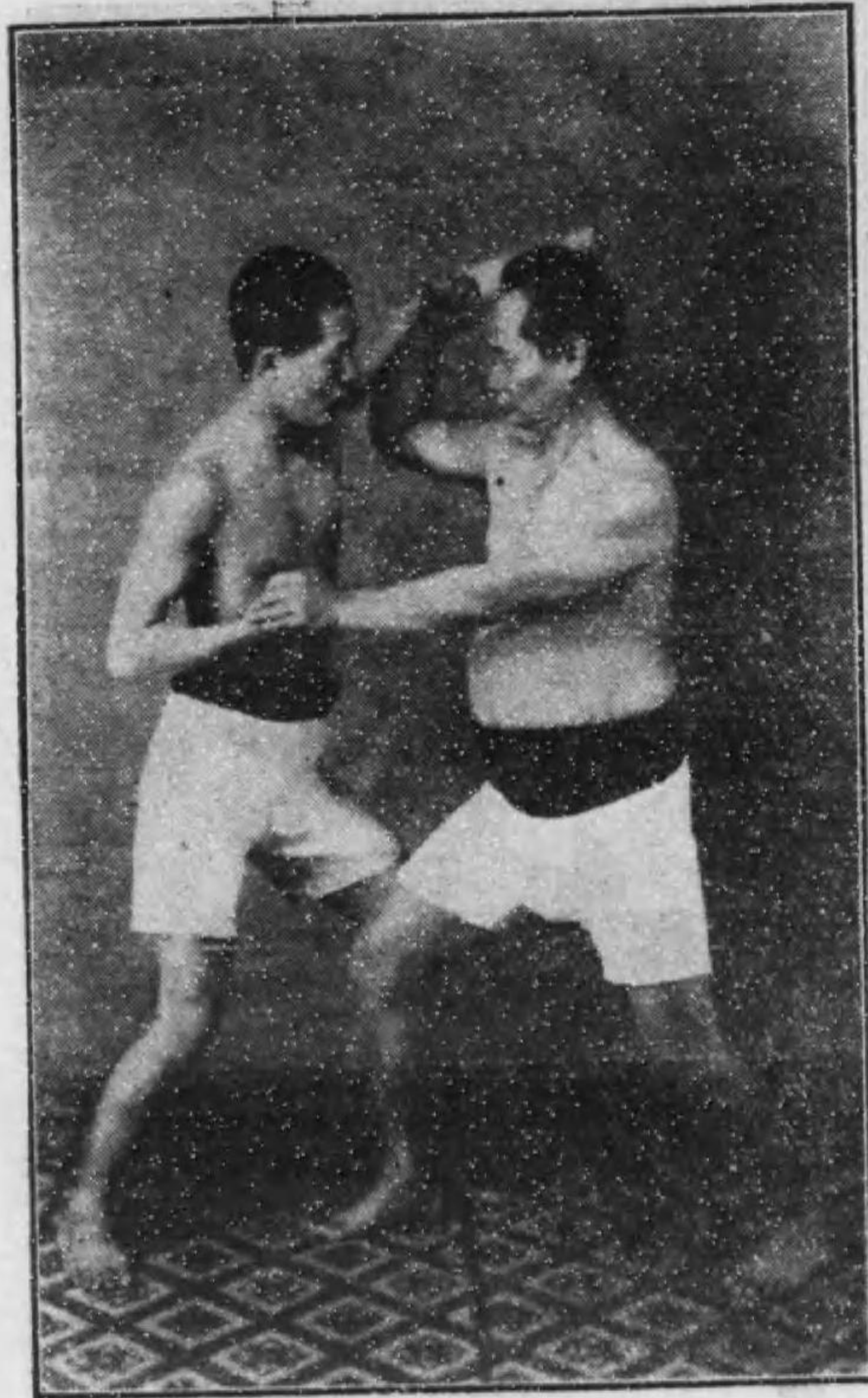
（一其） Ⅰ 圖五第



雙方相對せる時の一種

の構へ。

（二其） Ⅰ 圖六第



前圖に於て、敵が左拳にて我顔面へ突き來るを我右手にてふかく敵の左腕の所に受け外すに同時に、我左手にて敵の右拳をさゝり止める。

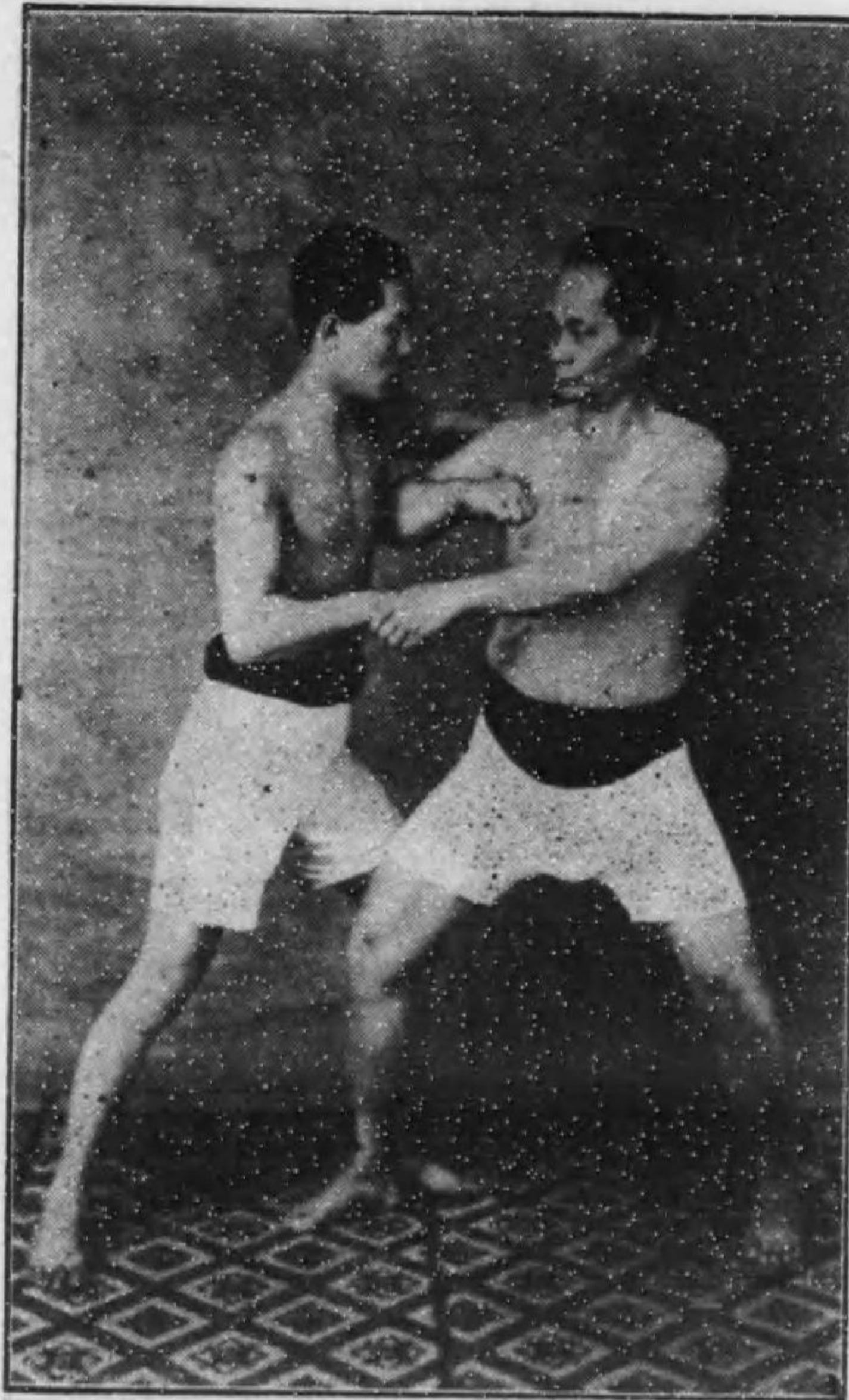


（一其） 第 八 圖



敵が右拳にて我顔面へ  
突き来るを、我左手にて  
打ち外す形。

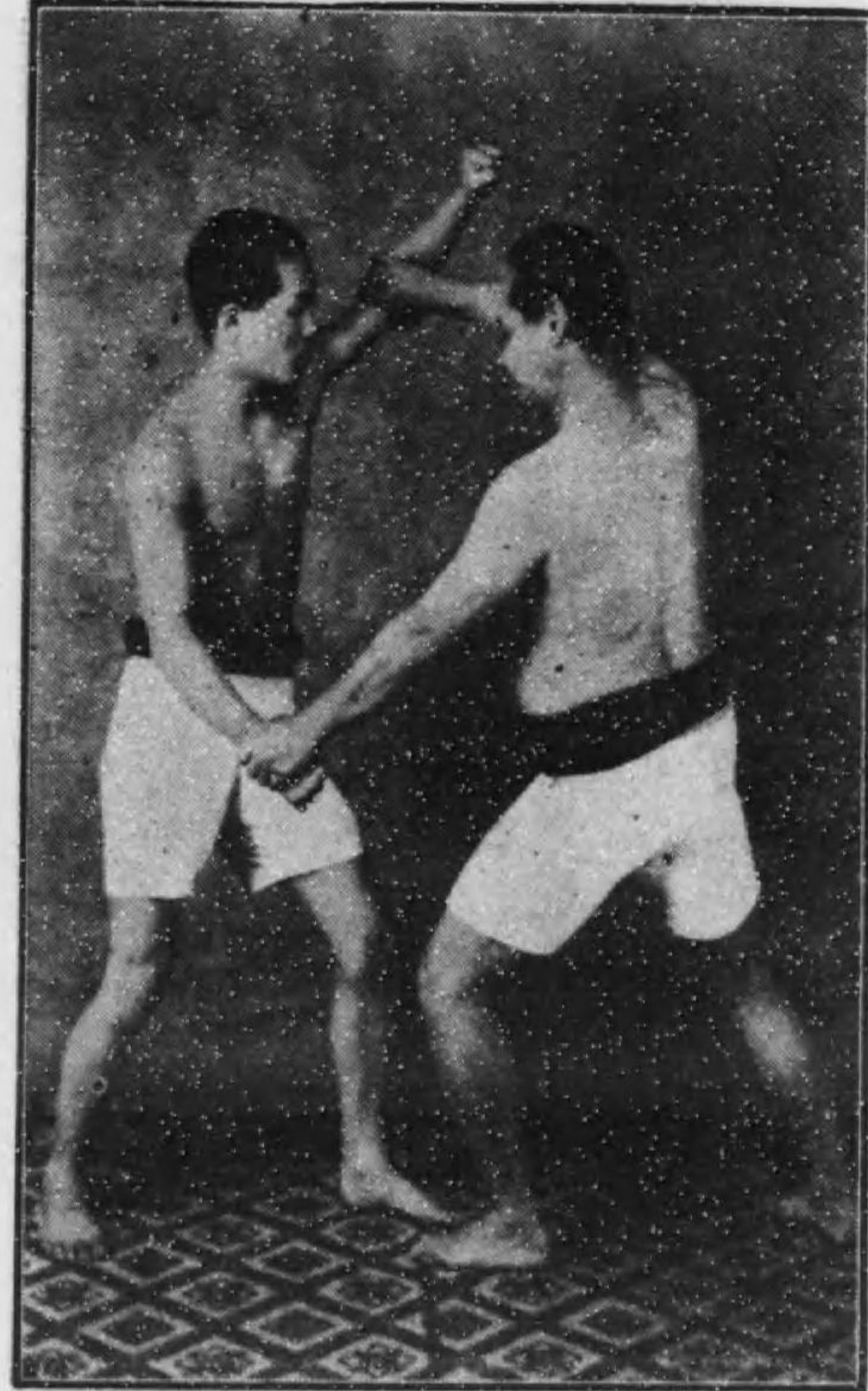
（三其） 第 七 圖



前圖に於て、我右手に  
て敵の左拳を受け外すこ  
同時に、受けたる我右肘に  
て敵の左胸部へ突き込む

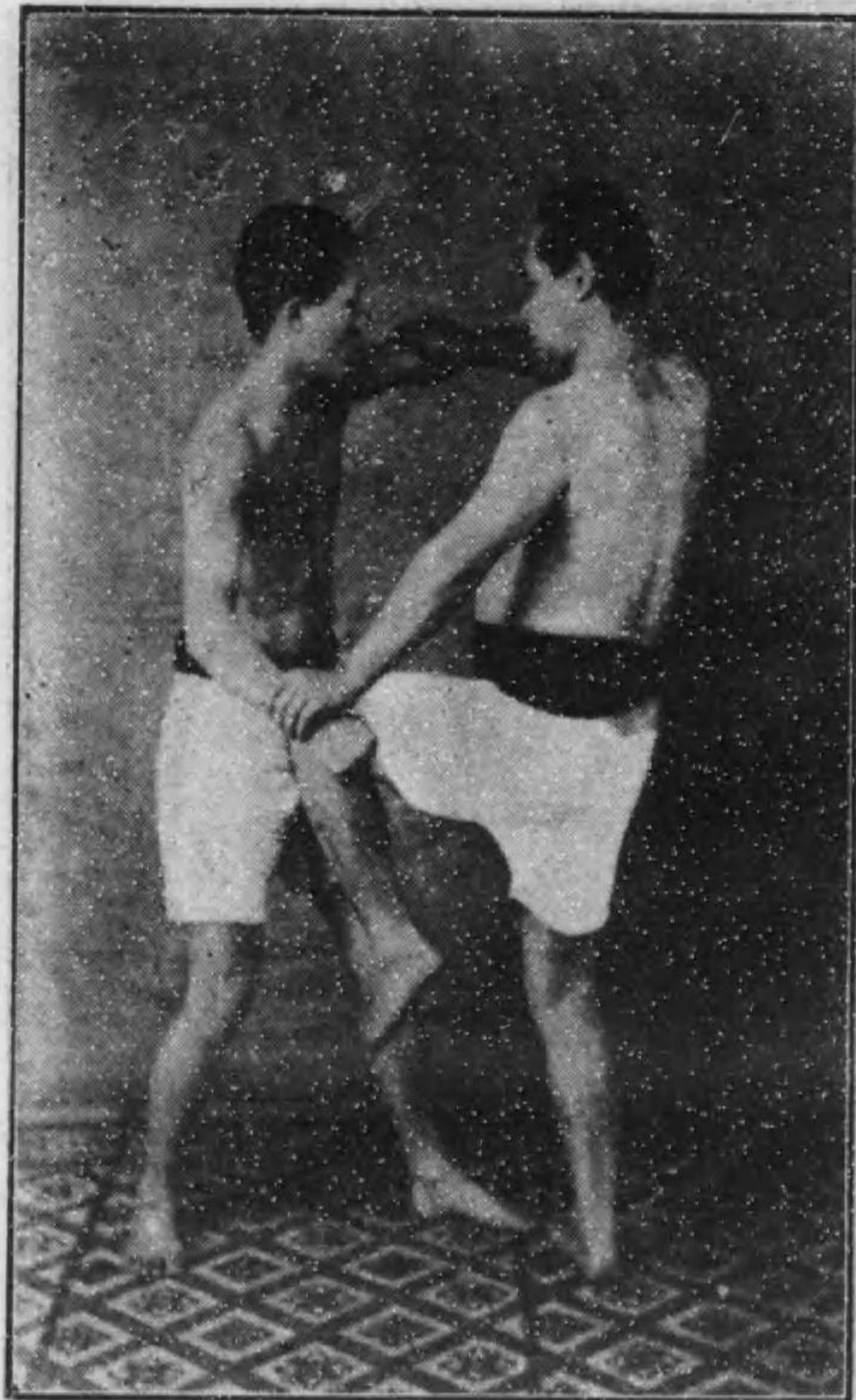


（二其） □ 圖九第



前圖に於て、敵が右拳を打ち外されるに同時に左拳にて再び我顔面へ突き來るを、我は右手にて敵の左腕を掴むと同時に我左手は敵の右手首を引き掴む。

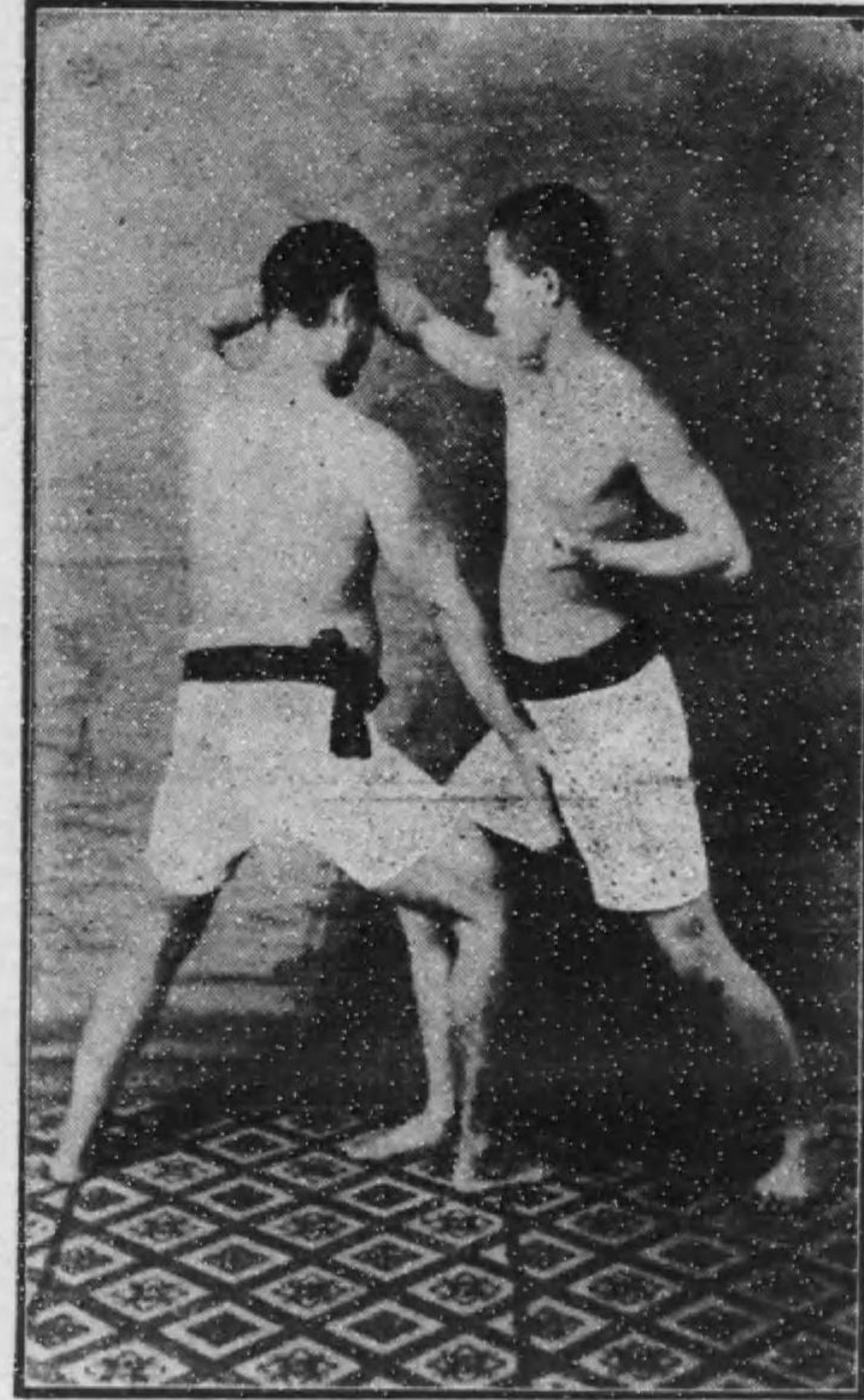
（三其） □ 圖十第



同前圖に於て、我右手にて敵の左腕を掴むと同時に我左手は敵の右手首を引き掴むや否や我左肘膝にて敵の罌へ突き込む

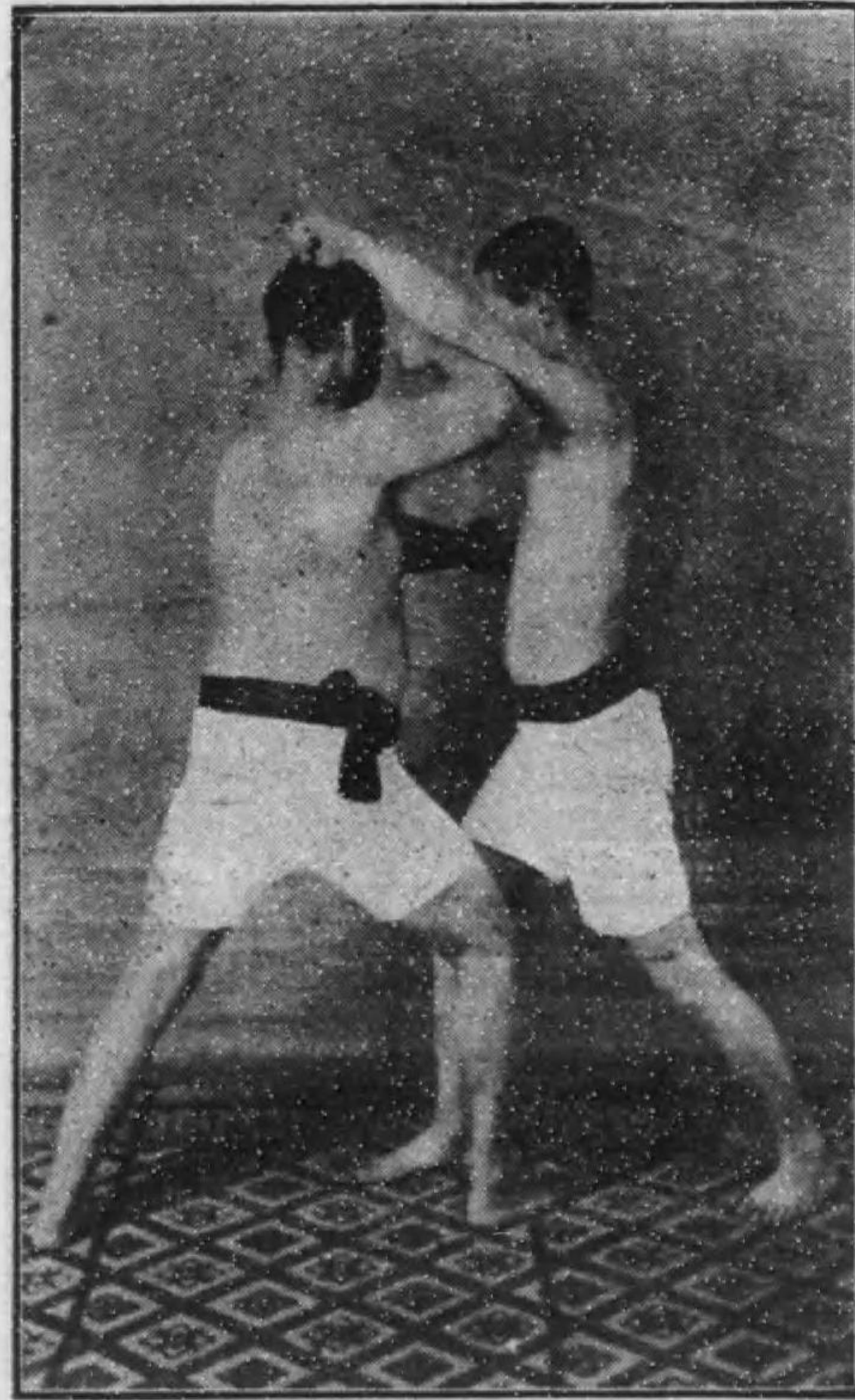


（一其） ハ 圖一十第



敵が右拳にて我顔面へ  
突き来るを、我左手にて  
受け外す。同時に敵の左  
手首を掴み、同時に我右  
手は敵の罨を掴む。

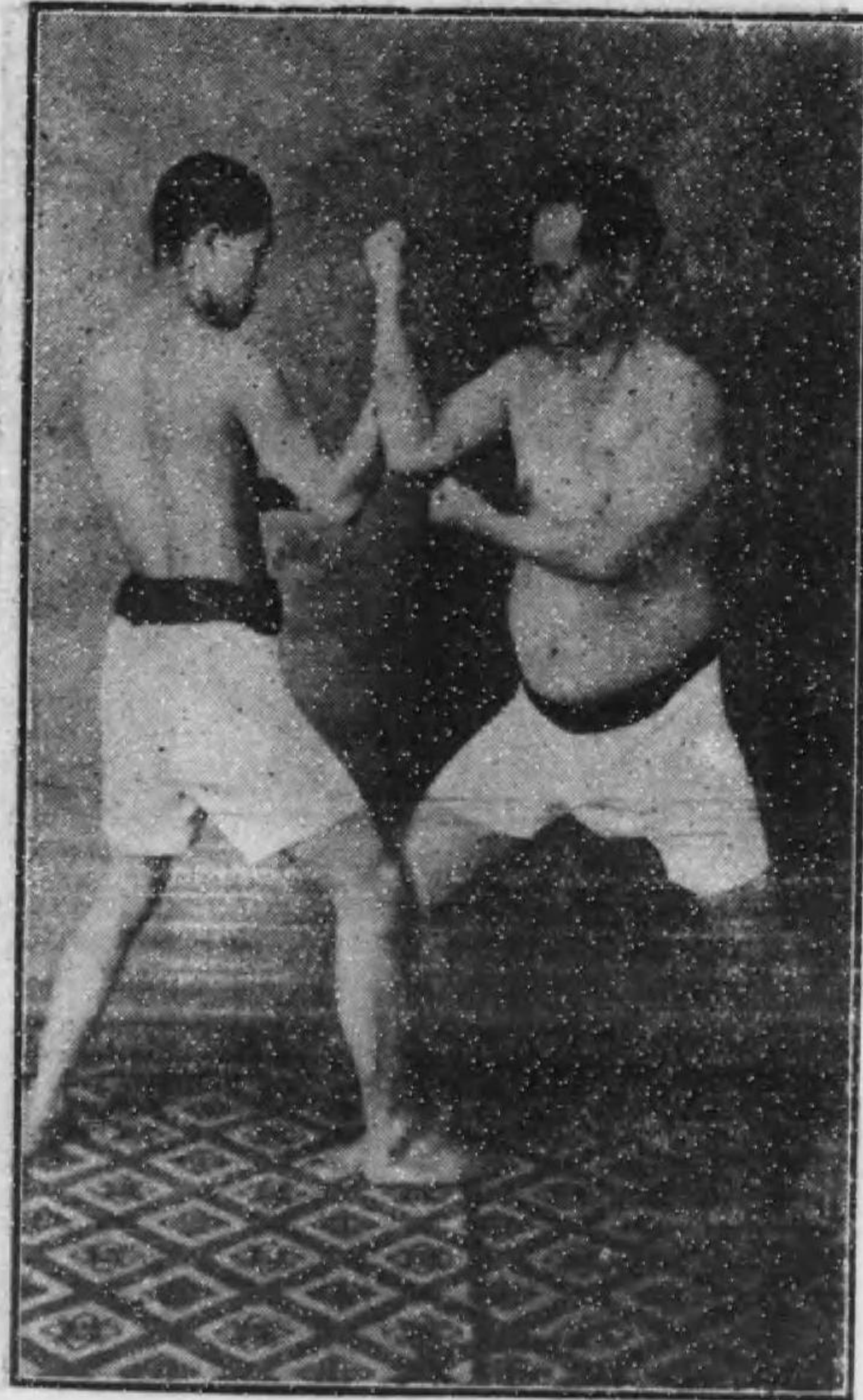
（二其） ハ 圖十二第



前圖に於て、敵は我顔  
面に隙あるを見て左拳に  
て突き来るを、我は罨に  
あてた右手にて敵の左腕  
肘の所にて受け外す形。

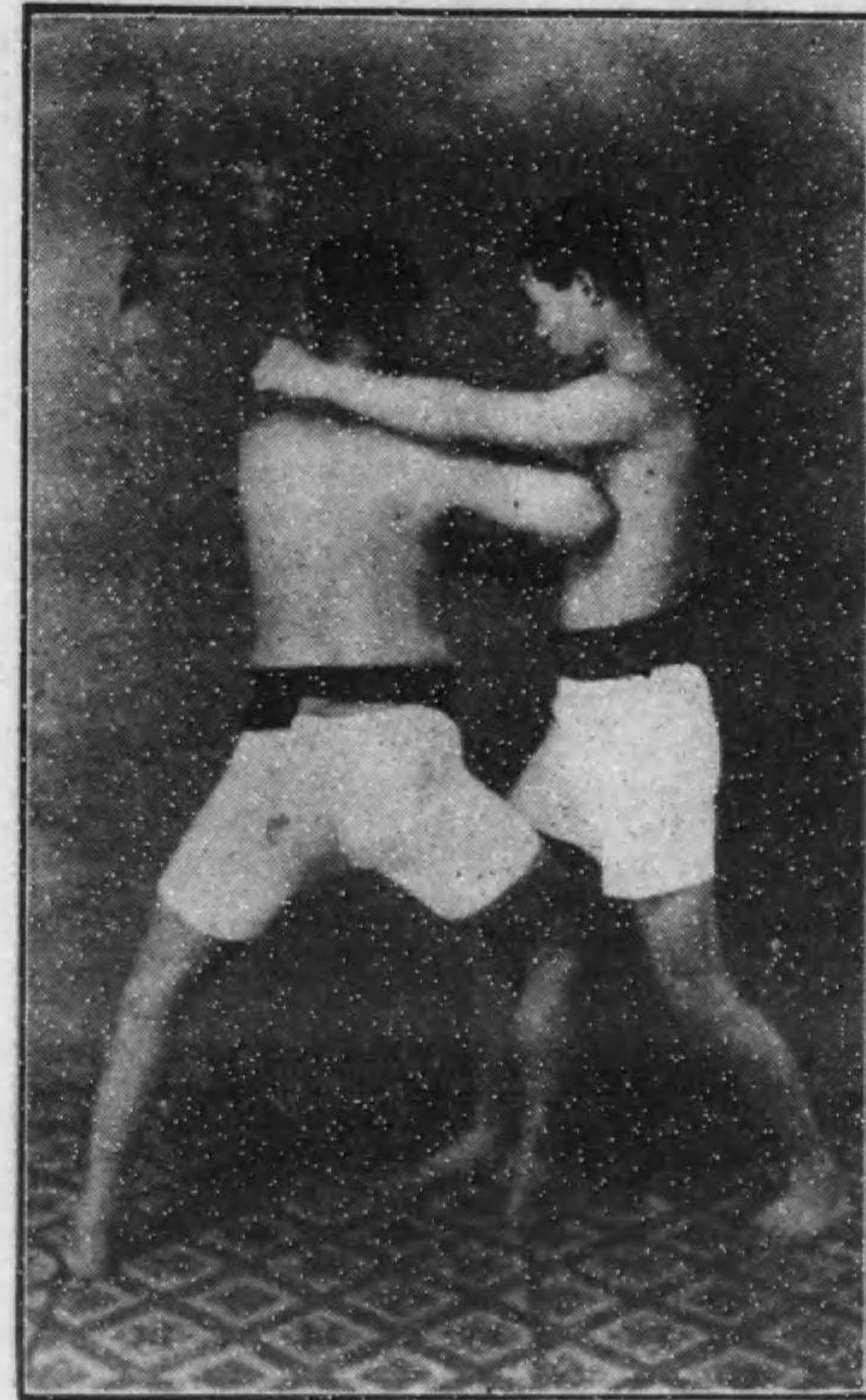


(一其) 二 圖四十第



圖の如く雙方相構へ、  
隙なき場合、我右拳にて  
敵の顔面を裏打らせしに  
敵の右手にて受けられた  
る形。

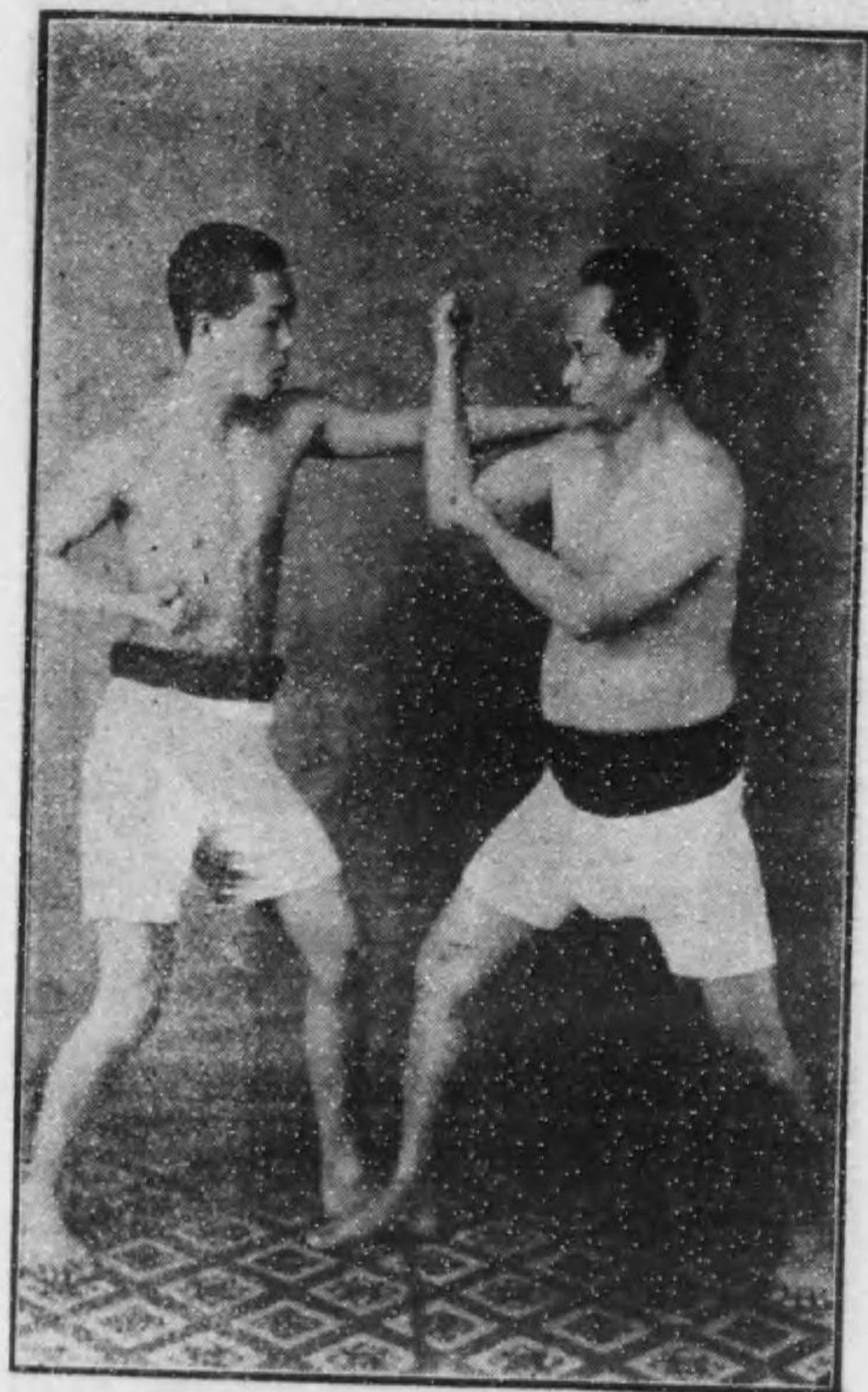
(三其) ハ 圖三十第



前圖に於て、我右手に  
て敵の左拳を打ち外すに  
同時に、我右肘にて敵の  
胸部へ打ち込む。

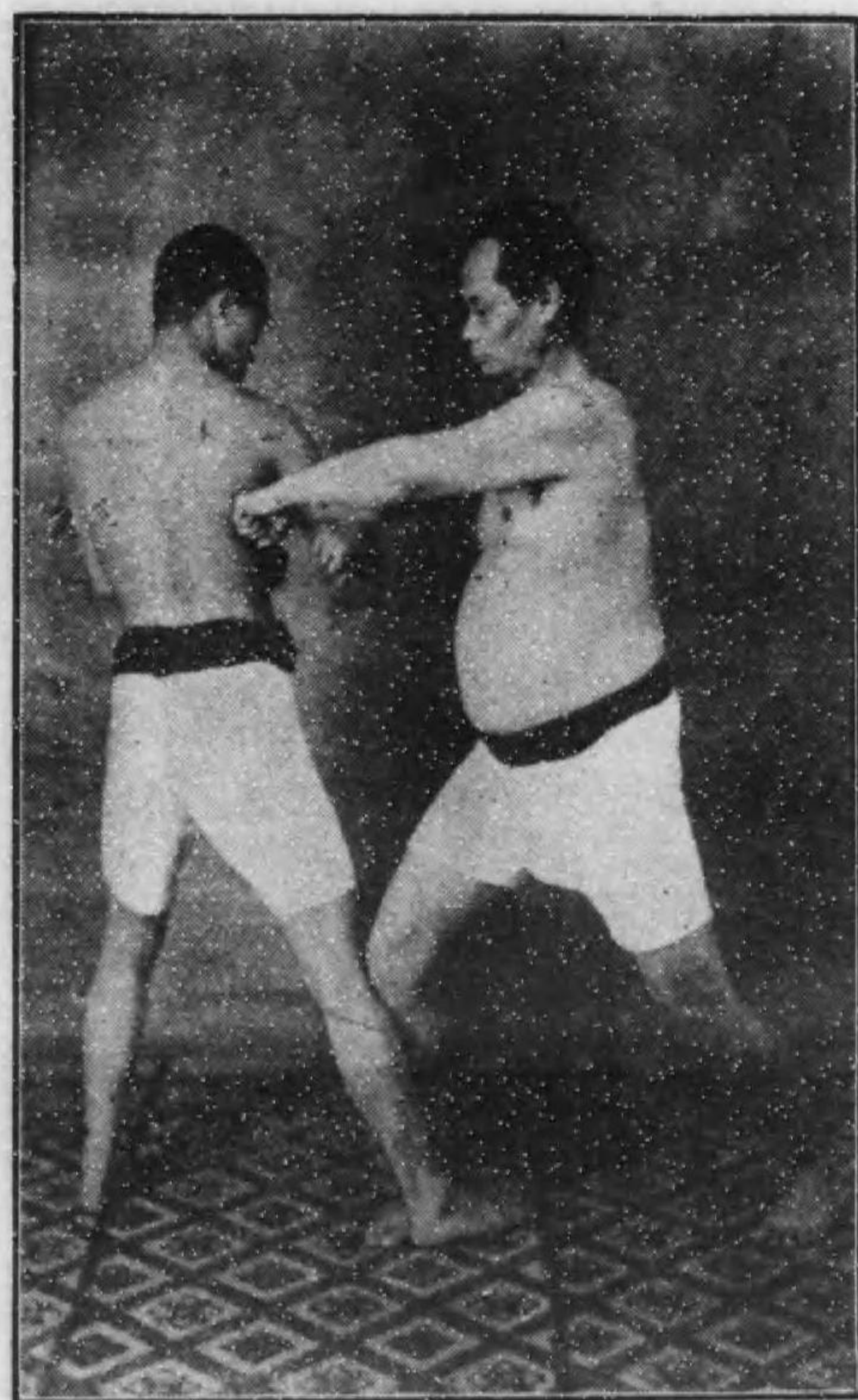


(一其) 木 圖六十第



敵が左拳にて我顔へ突  
き來るを、我右手にて受  
け外す形。

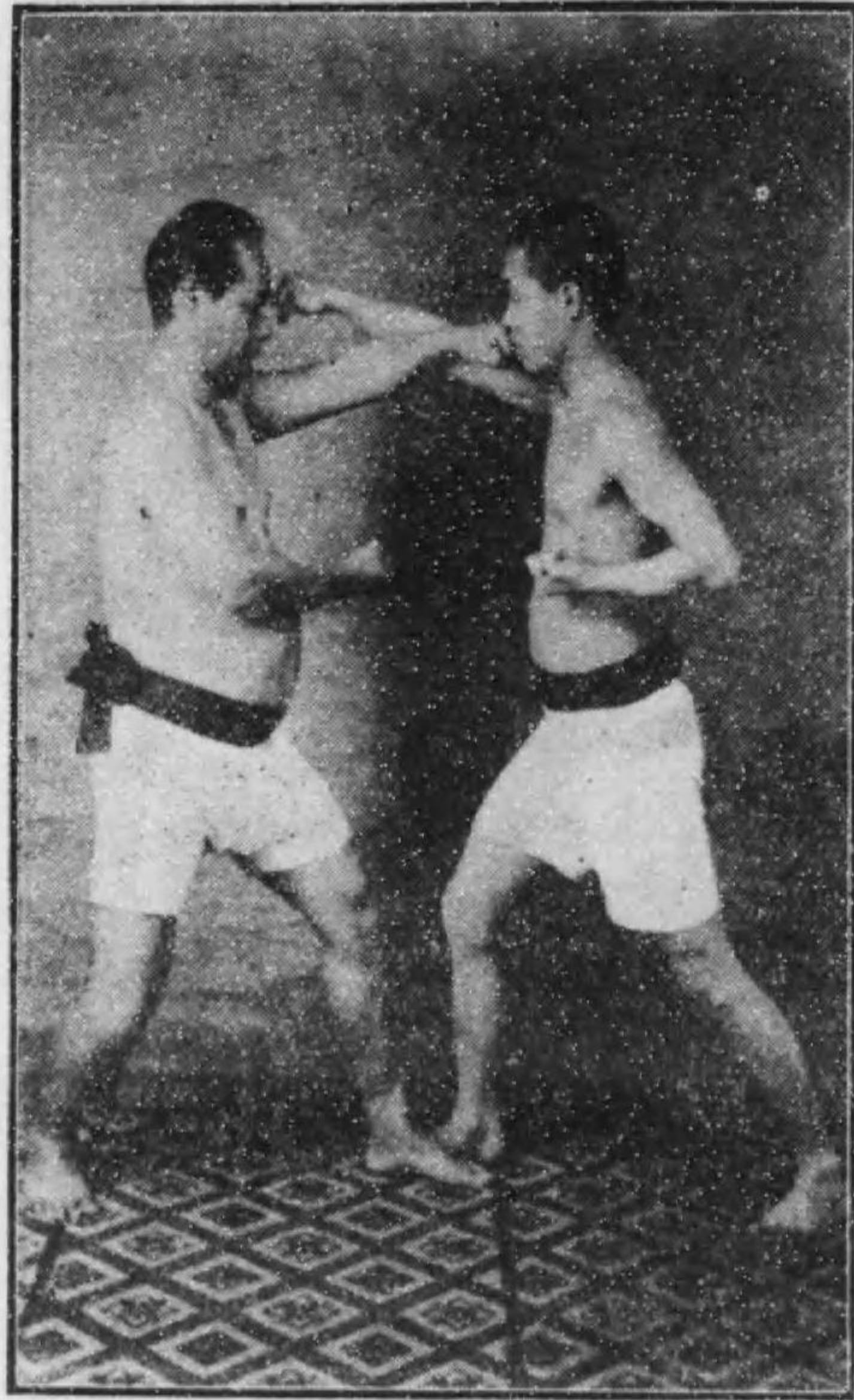
(二其) 二 圖五十第



前圖に於て、敵に受け  
らるゝや、我右手にて敵  
の右肘を押し開く。同時  
に、我左拳にて敵の右脇  
腹を突く。

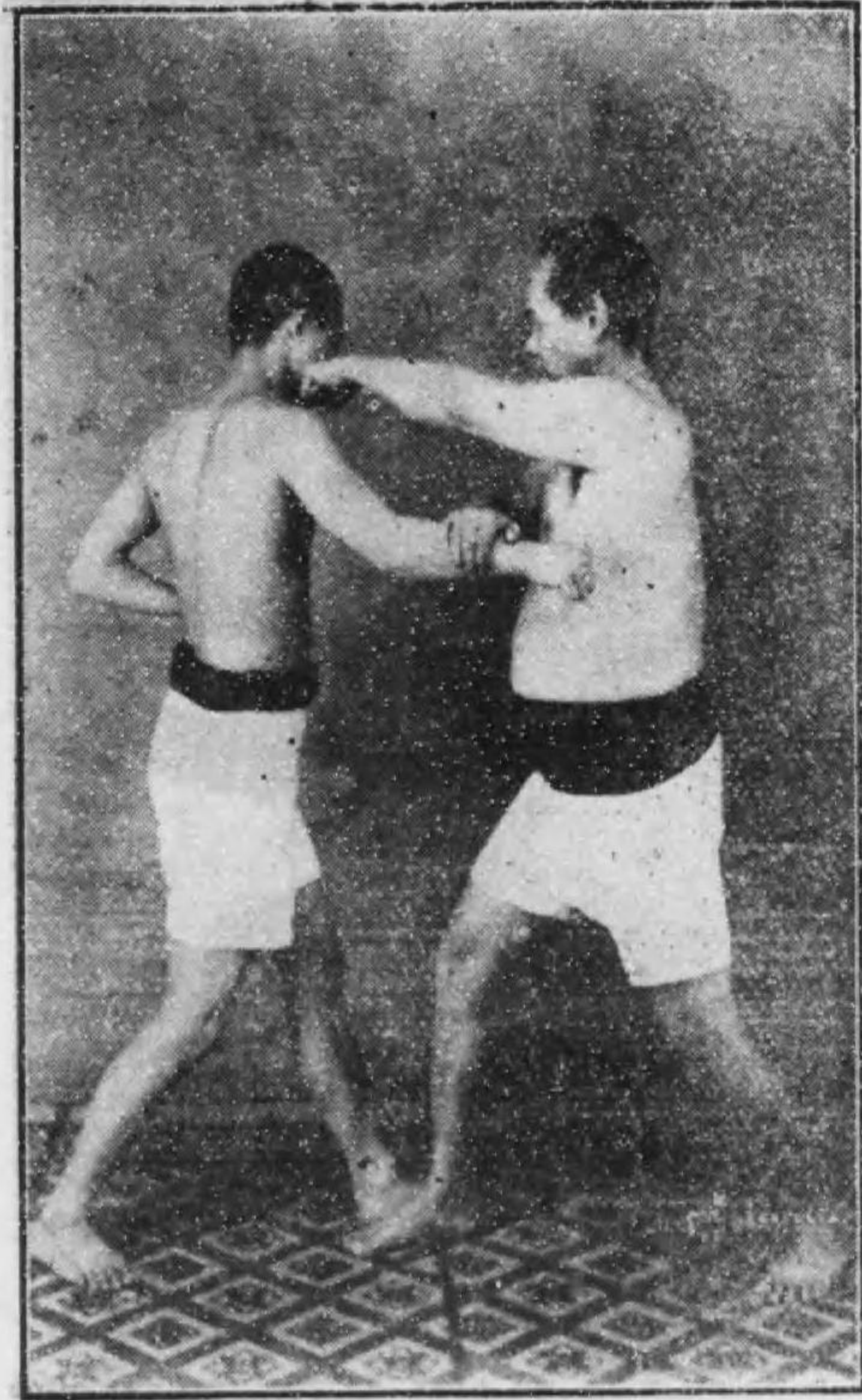


(一其) 第八十圖



敵が右拳にて我顔面へ  
突き来る時、我左拳にて  
打ち外すと同時に敵の顔  
面ハ突き込む。

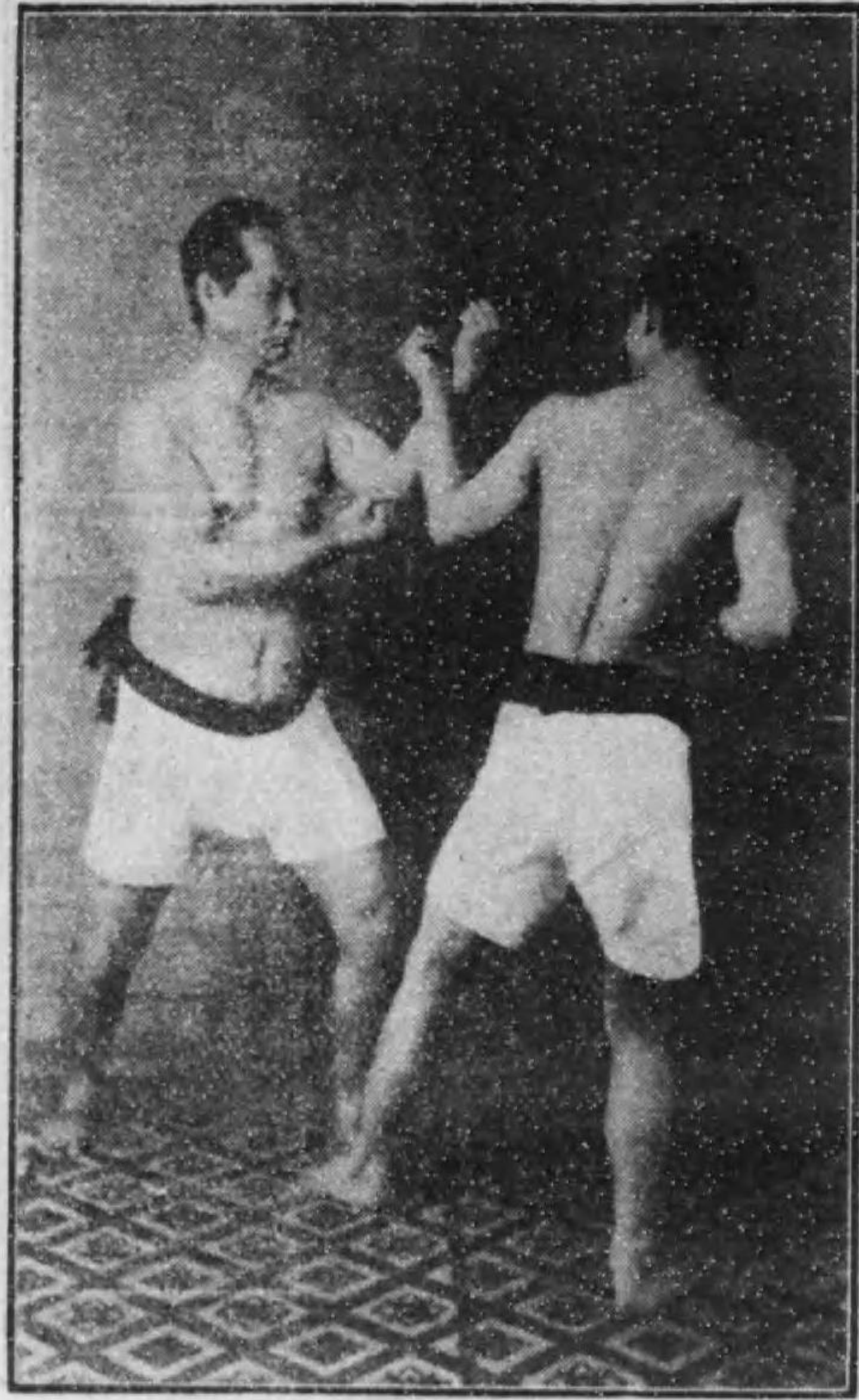
(二其) 第七十圖



前圖に於て、敵が左拳  
を受けられると同時に右  
拳にて我胸部へ突き来る  
を、我は敵の左拳を受け  
た右手にて之を受け外す  
と同時に、我左拳にて敵  
の顔面へ突き込む。

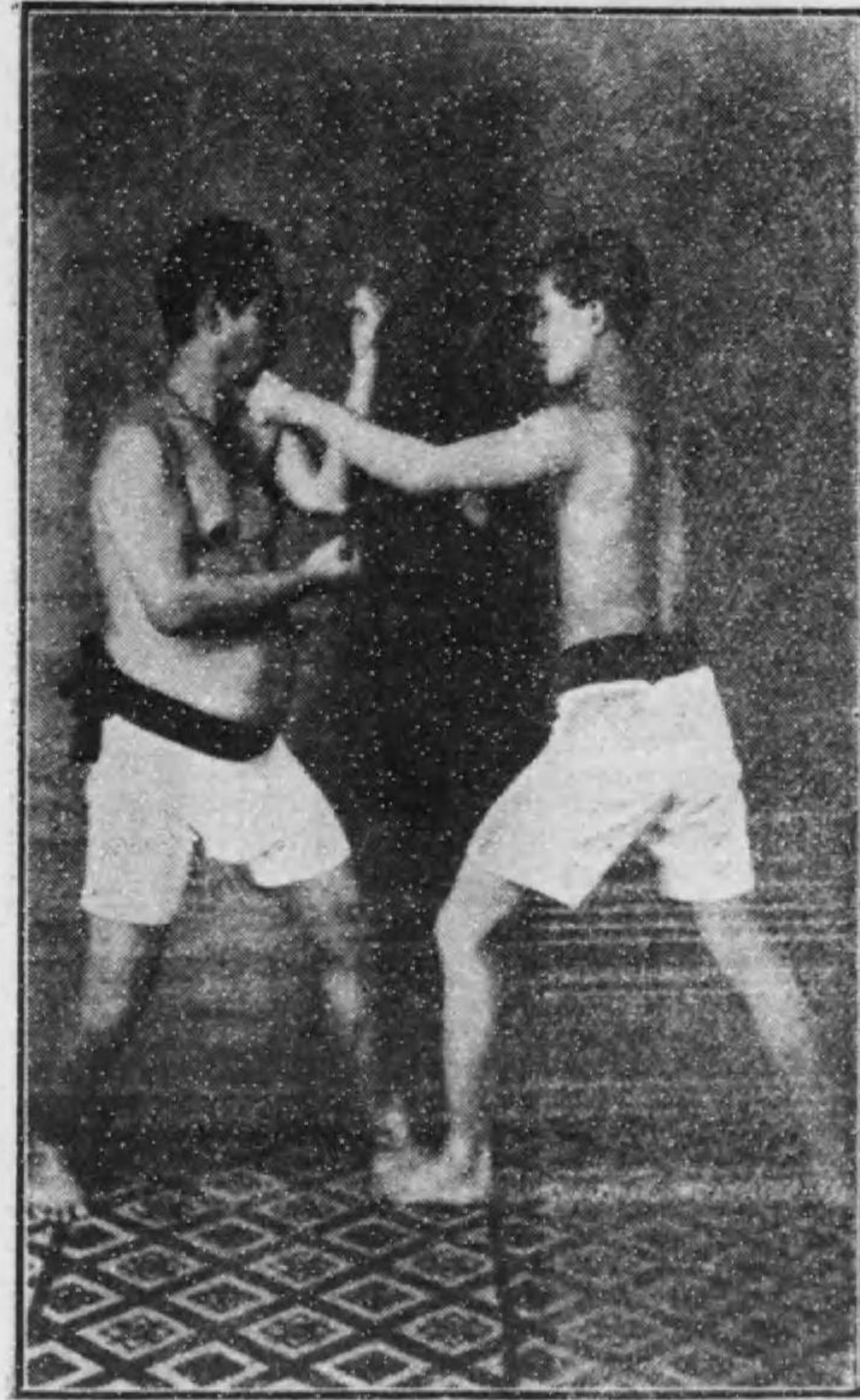


(三其) ~ 圖十二第



前圖に於て、我左拳にて數の左拳を打ち外すに同時に我左拳を以て敵の顔面へ打ち込みしを、敵はひるまず受けられし左拳にて我左拳を引き外す形。

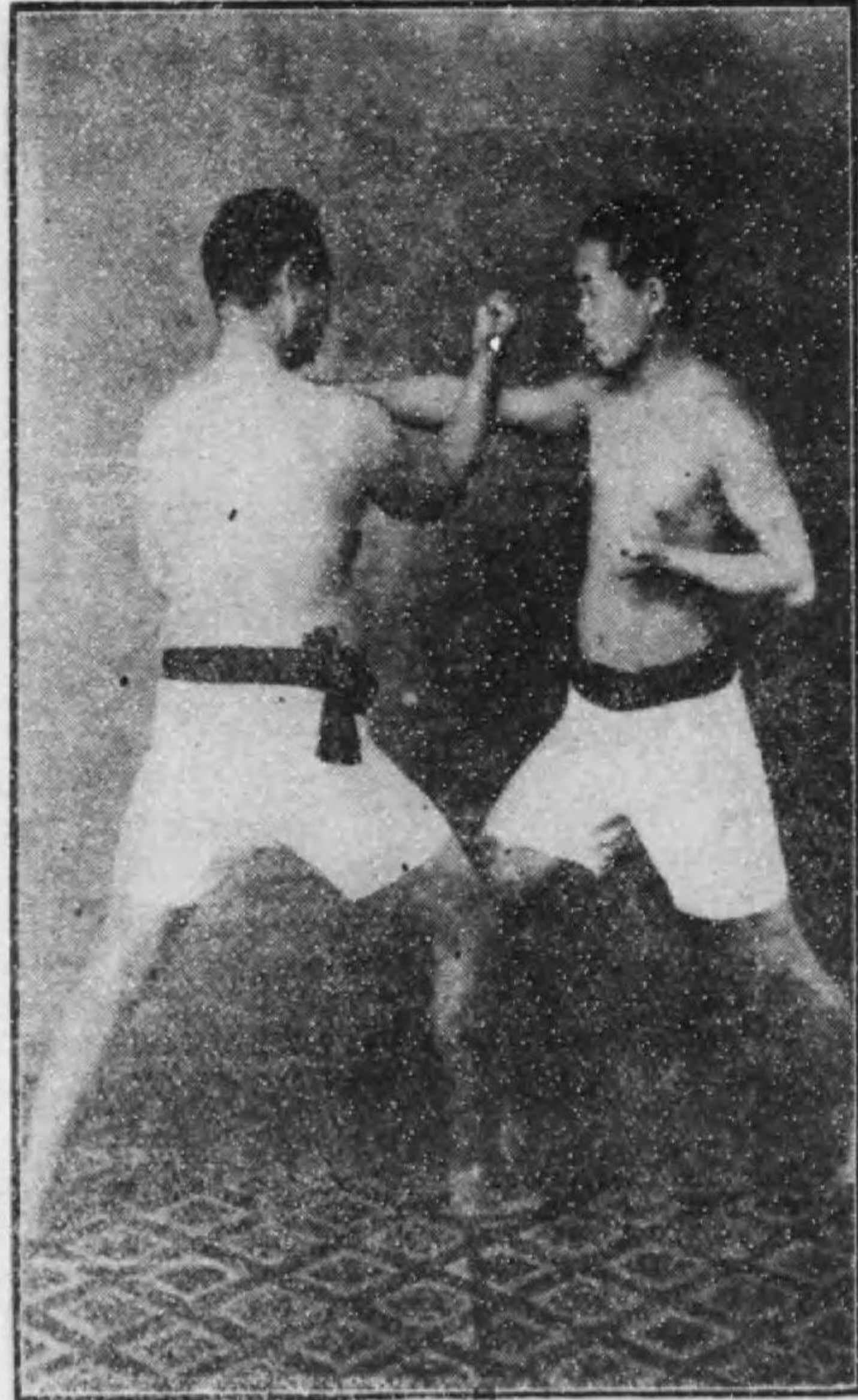
(二其) ~ 圖九十第



前圖に於て、我左拳を敵の顔面へ打ち込みしを敵はひるまず左拳を我顔面へ打ち込むを、我れは左拳を引ききて打ち外す形

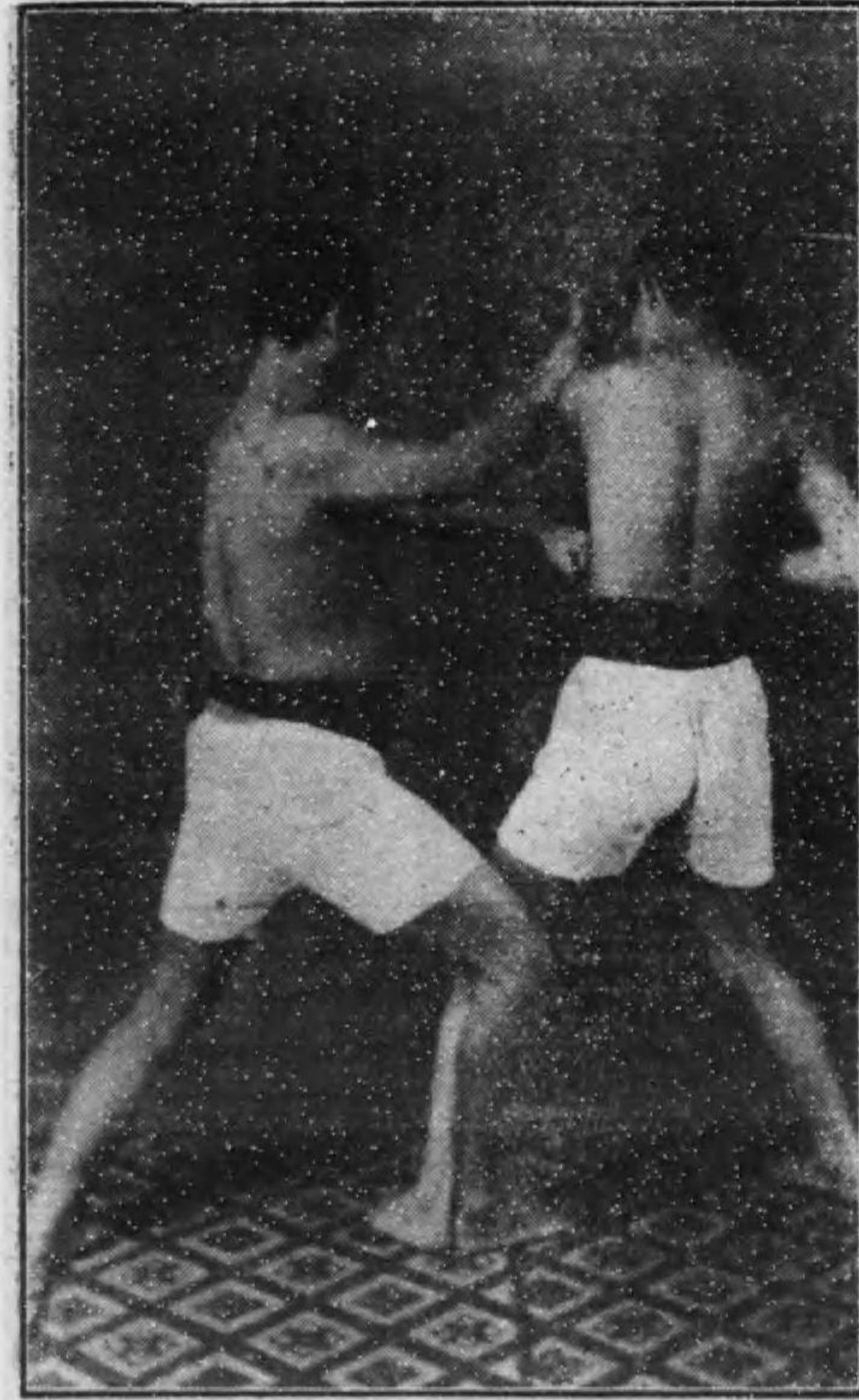


(一其) ト 圖二十二第



敵か左拳にて我胸部へ  
突き込むを、我右拳にて  
受け外す形。

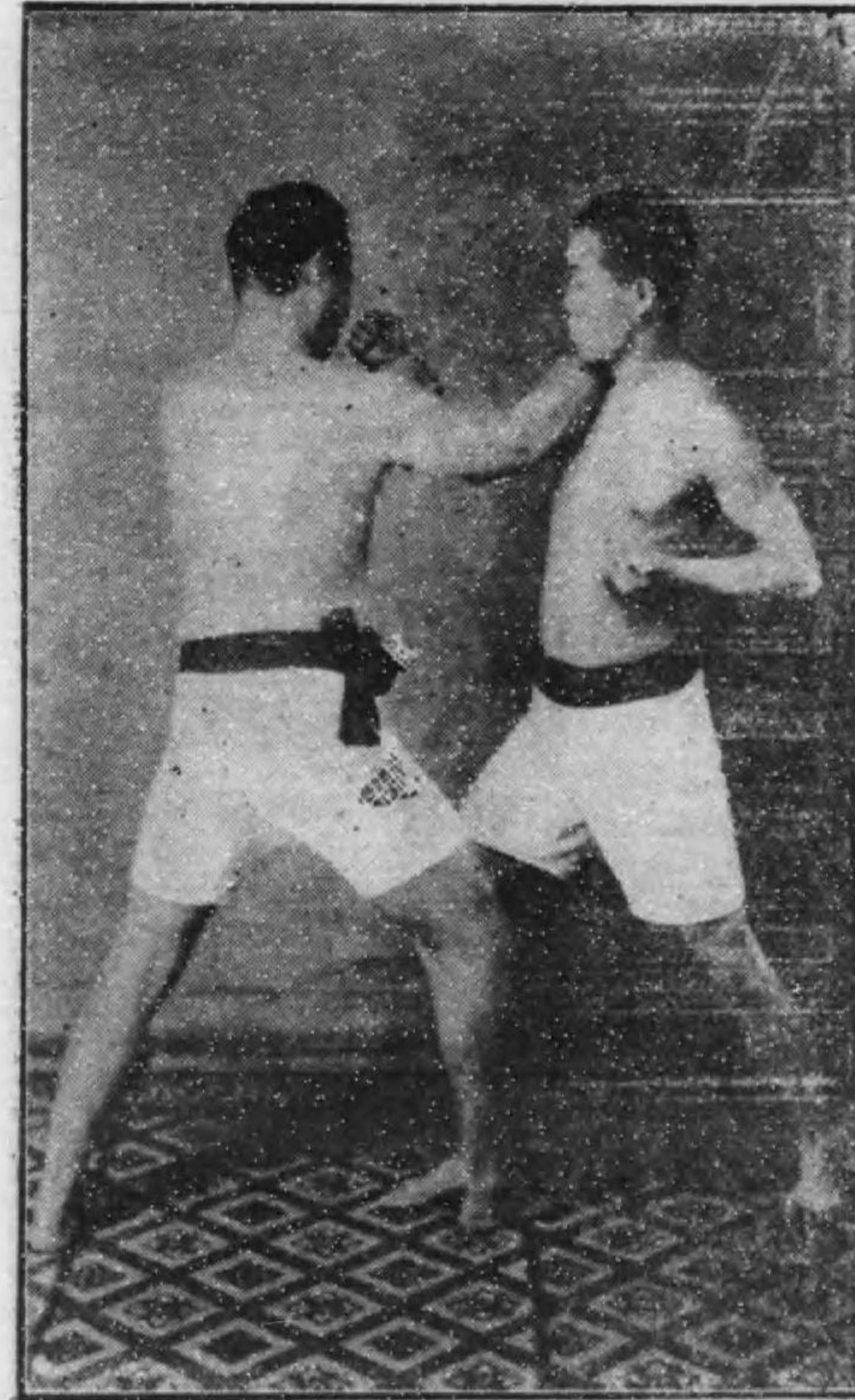
(四其) 〰 圖一十二第



前圖に於て、敵が左拳  
にて我左拳を引き外さん  
と、自己の左拳を引き同  
時に體をひねらんとする  
を、我はひるます右手に  
て敵の左肘を掴み押し、  
同時に我右足を敵の左足  
後に踏み込み、左拳にて  
敵の左脇腹へ突き込む。

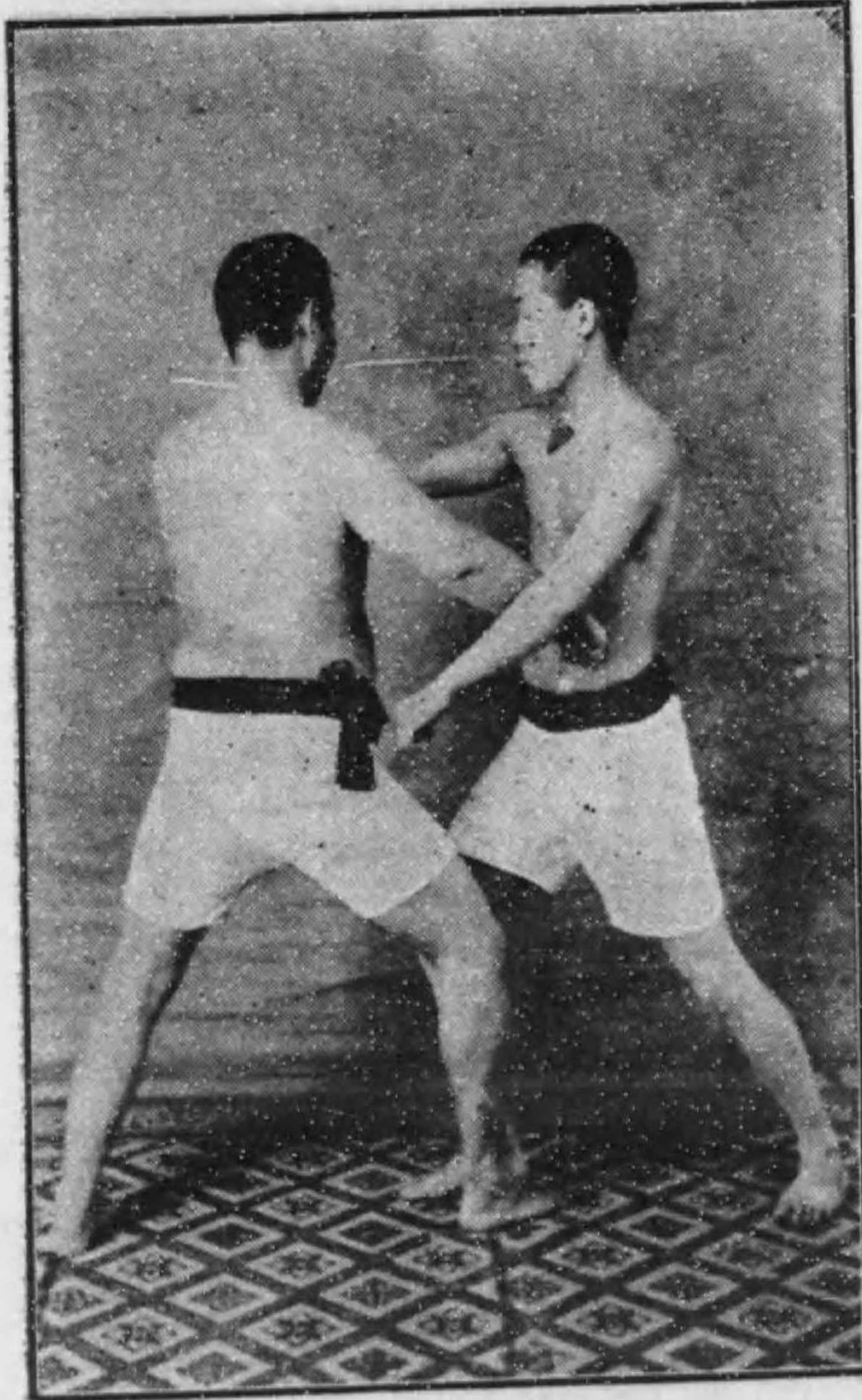


(二其) ト 圖三十二第



前圖に於て、我右手に  
て敵の右拳を打ち外すこ  
同時に、我右拳を敵の首  
に打ち込む。

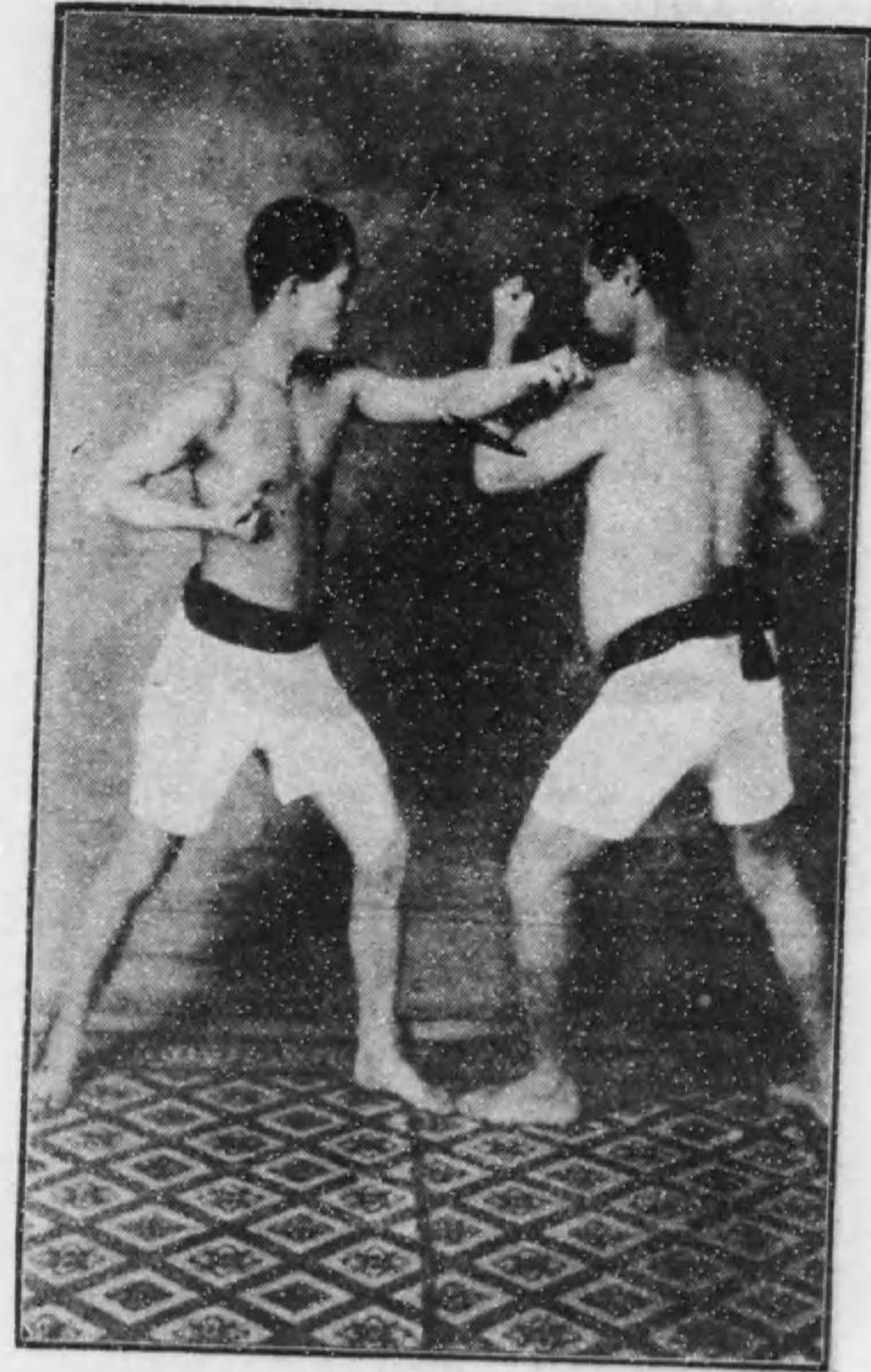
(三其) ト 圖四十二第



前圖に於て、我右拳を  
敵の首へ打ち込みし時、  
敵ひるまや我右脇腹へ突  
き込むを我右肘にて拂ひ  
同時に敵の左脇腹を突く

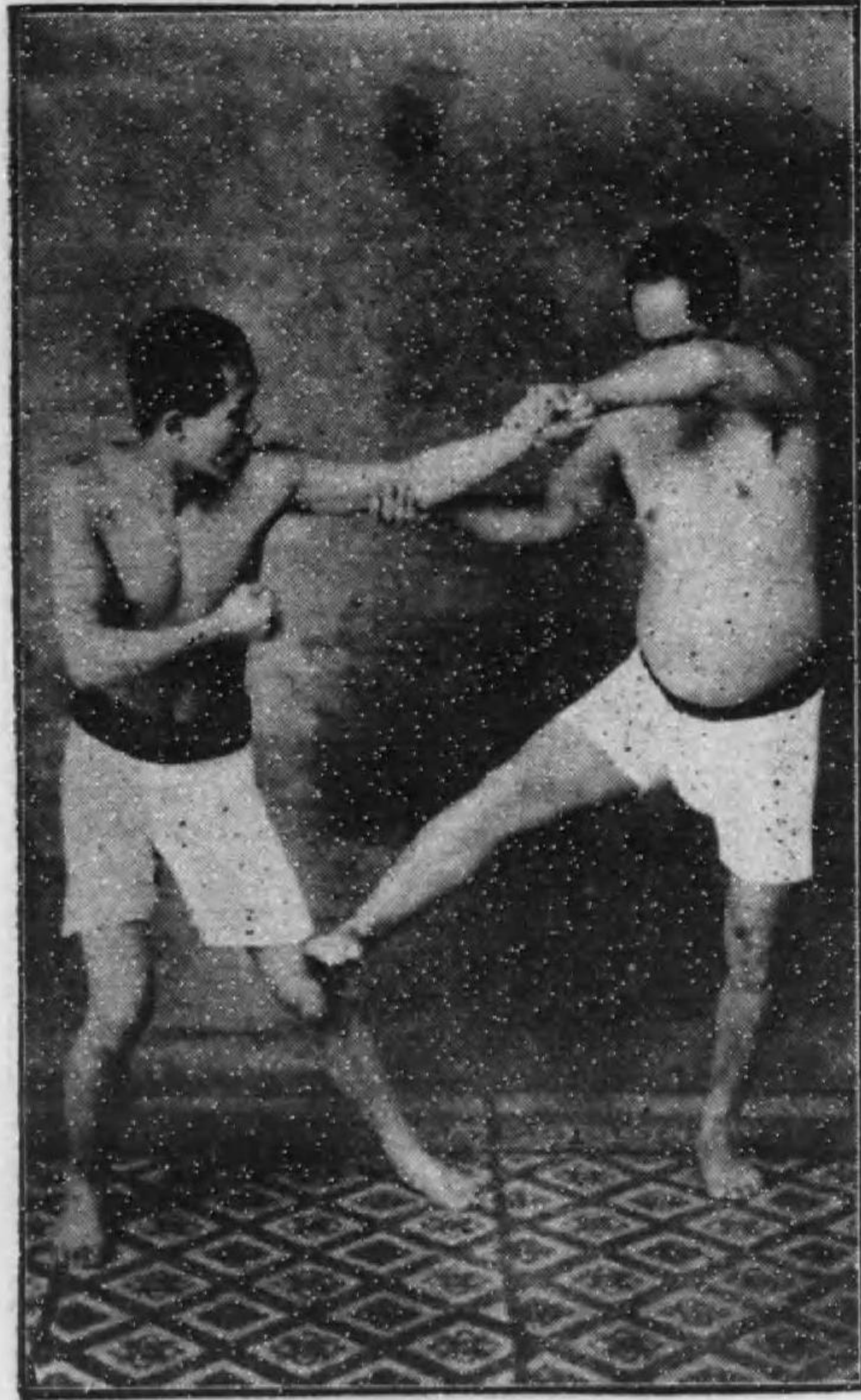


（一其） 手 圖五十二第



敵が左拳にて我顔面へ  
突き来る時、我左手にて  
敵の左拳を打ち外し、同  
時に我左手にて敵の左手  
首を握る。

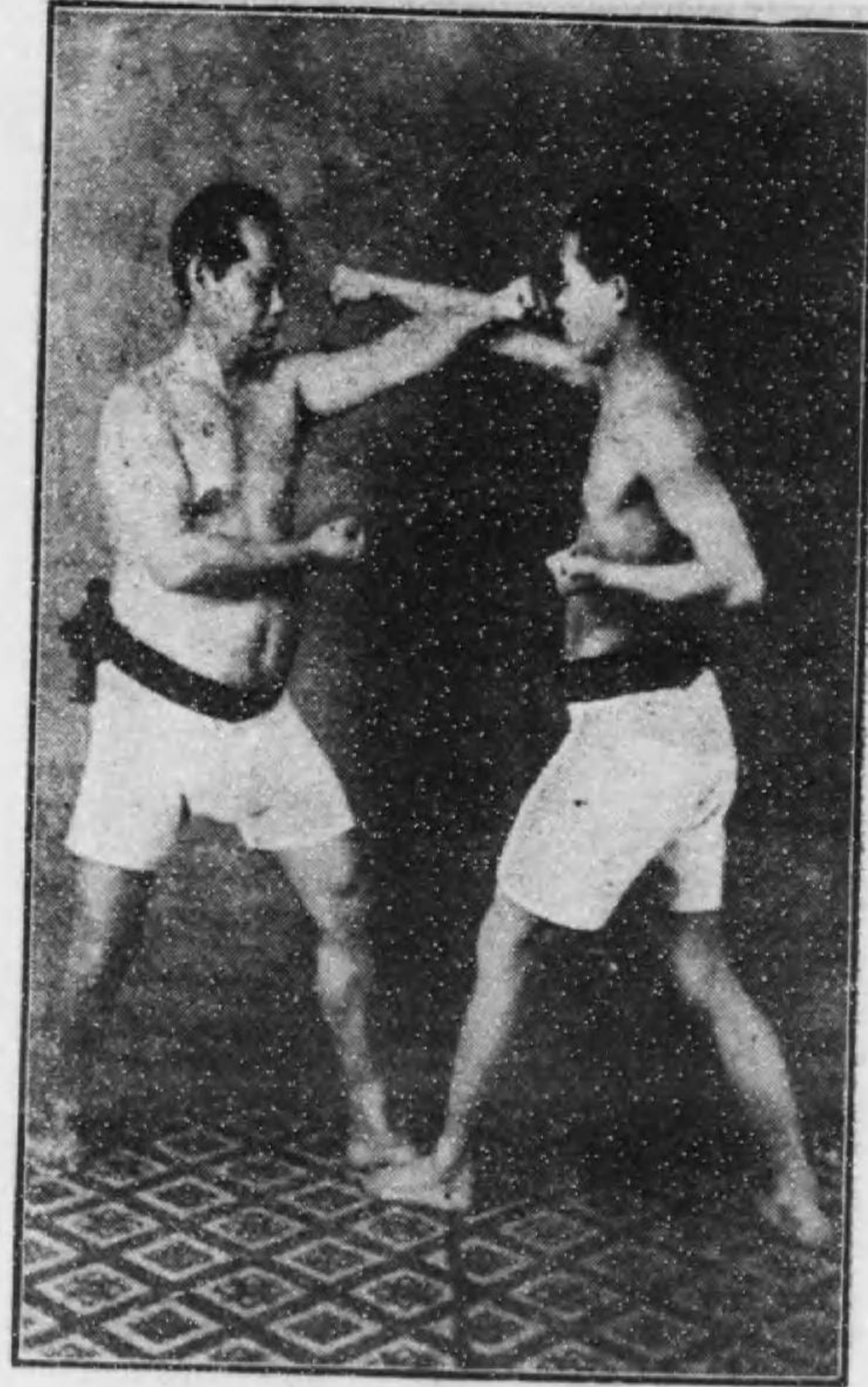
（二其） 手 圖六十二第



前圖に於て、敵の左拳  
を我左拳にて受け外すこ  
同時に我左手をひねり、  
敵の左手首を掴み我右手  
は敵の左肘を掴むと同時  
に、我右足にて敵の左膝  
を踏み挫く。

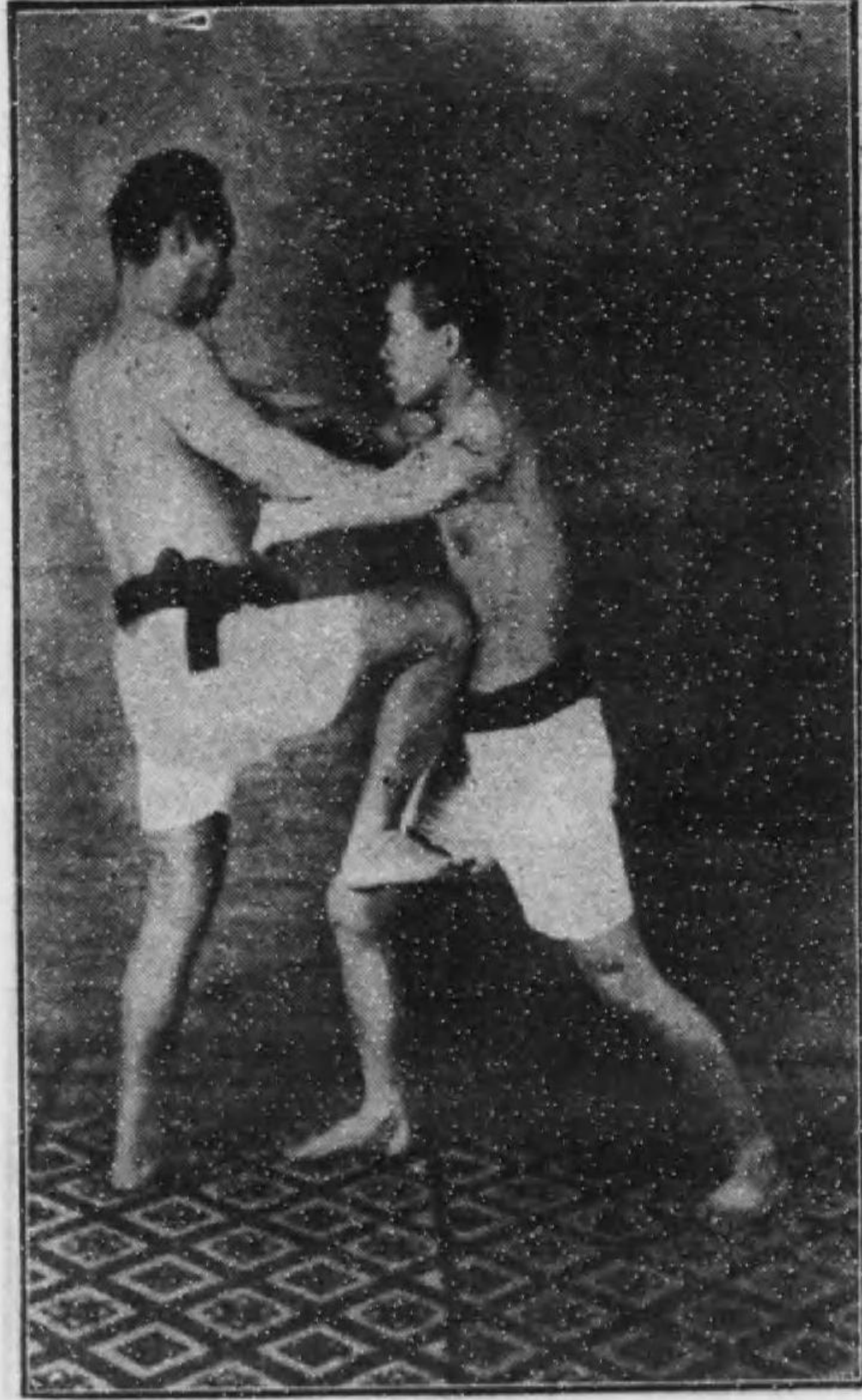


（一其） リ 圖七十二第



我顔面へ突き来る敵の  
右拳を、我左拳にて打ち  
外すと同時に敵の顔面へ  
突き込む。

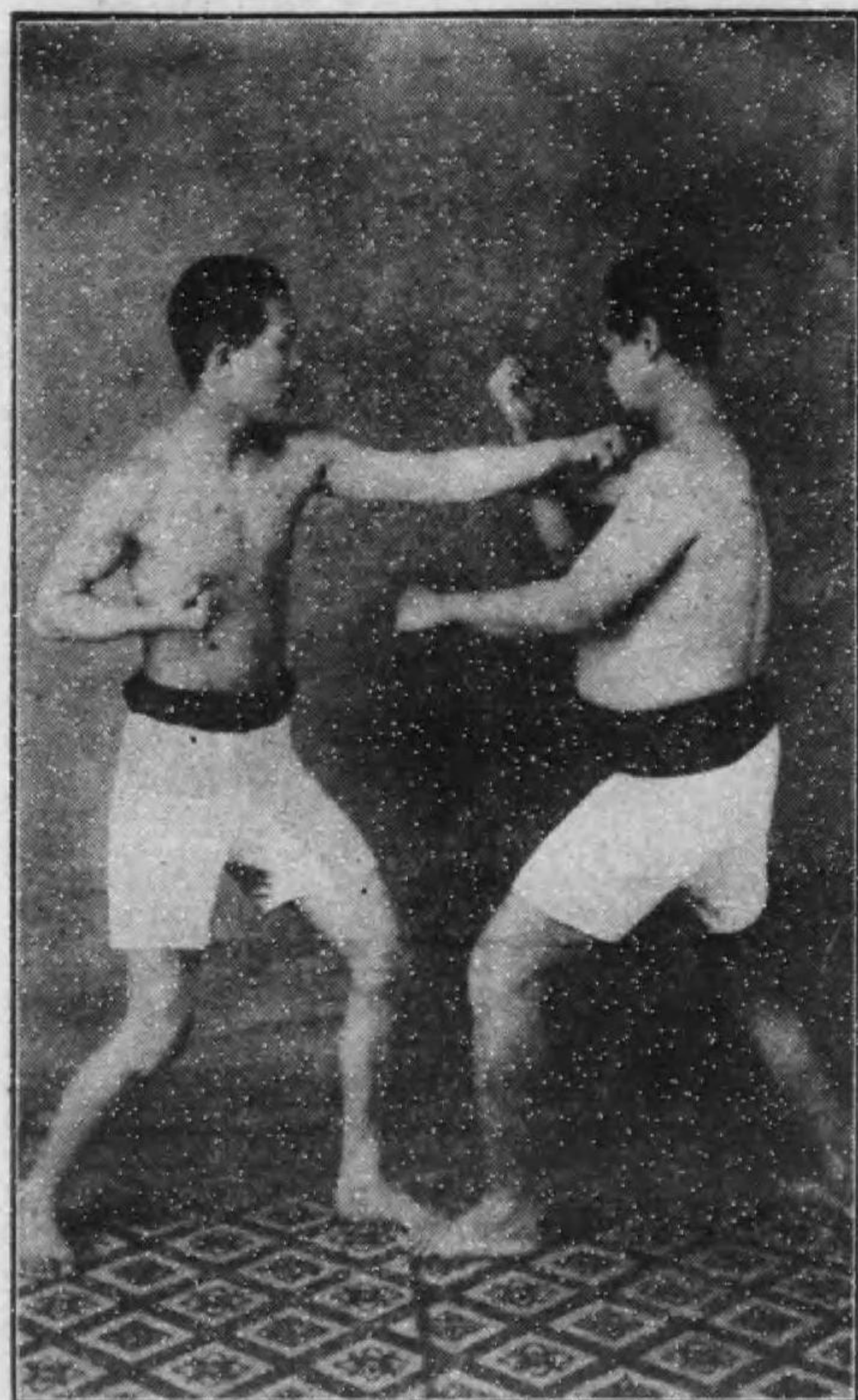
（二其） リ 圖八十二第



前圖に於て敵が怯まず  
左拳にて我顔面へ突き來  
る時我右手にて敵の左腕  
を掴み同時に我左手は敵  
の右腕をも掴み我右膝に  
て敵の鳩尾へ突き込む。



(一其) ヌ 圖十三第

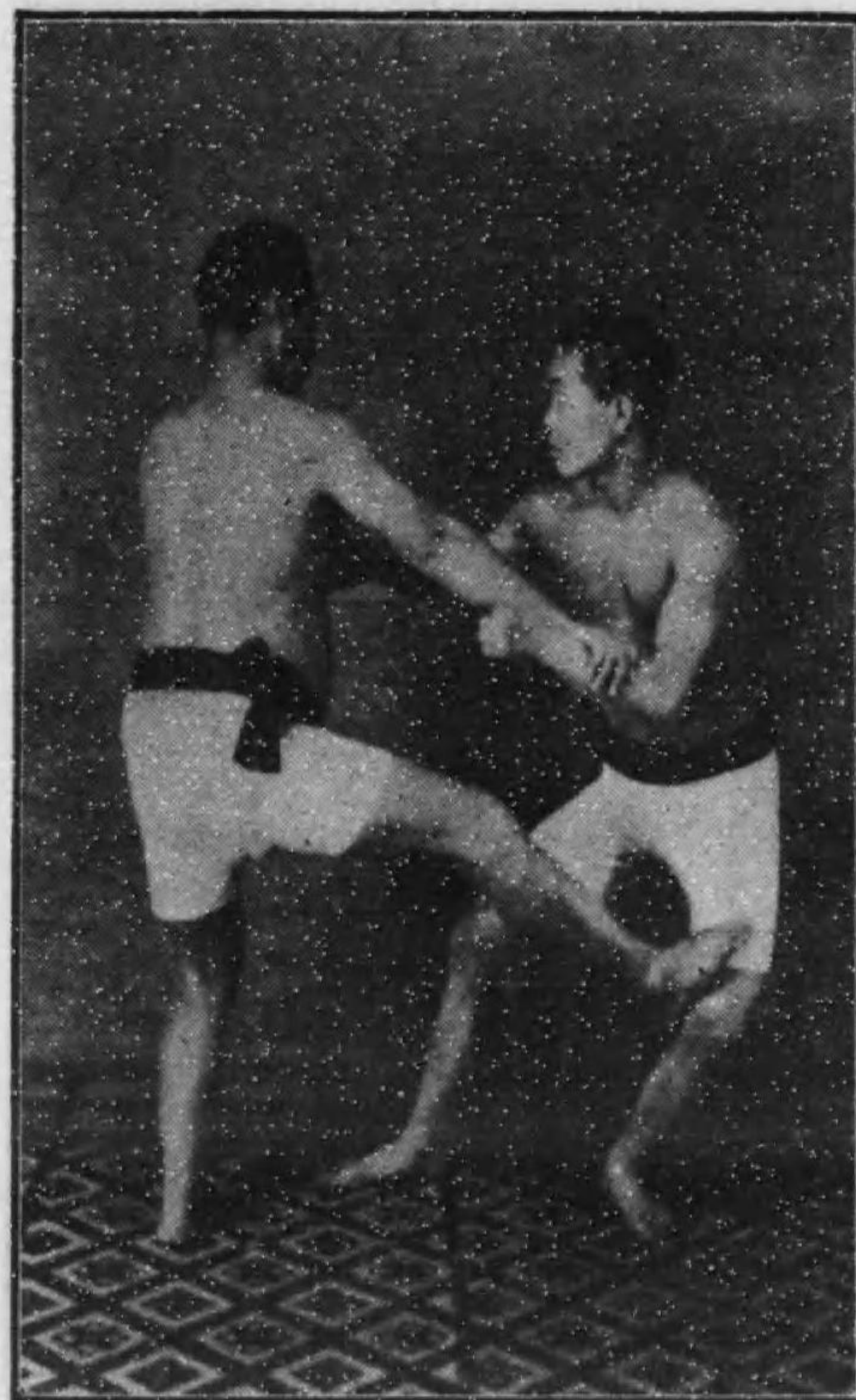


敵が左拳にて我顔面へ

突き来るを、我右手にて

打ち外す形。

(三其) リ 圖九十二第



前圖に於ける場合、敵

が腰を引き退かんとする

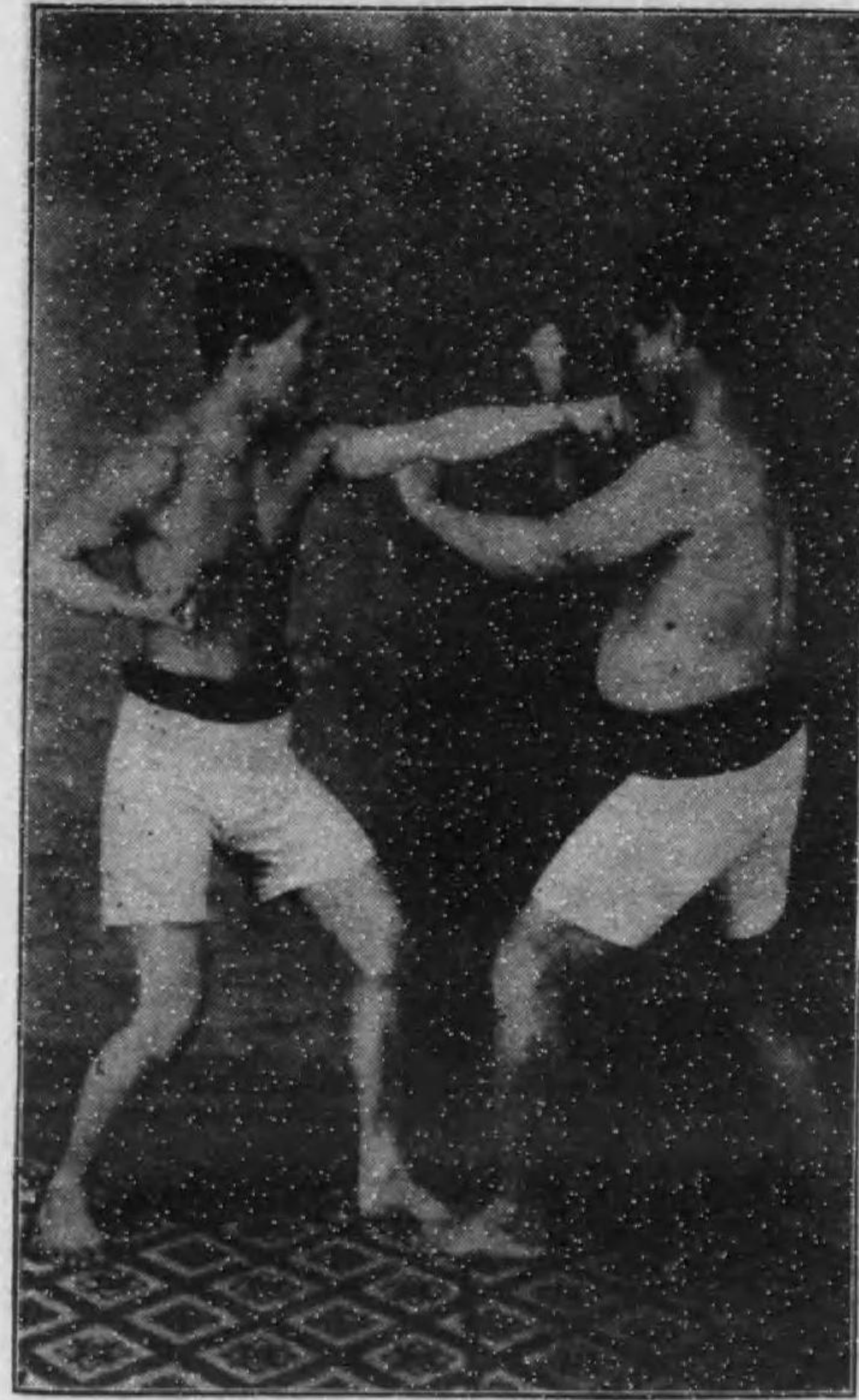
時、敵の両手を引き込む

と同時に、我右足にて敵

左膝を踏み潰す。



(二其) 又 圖一十三第



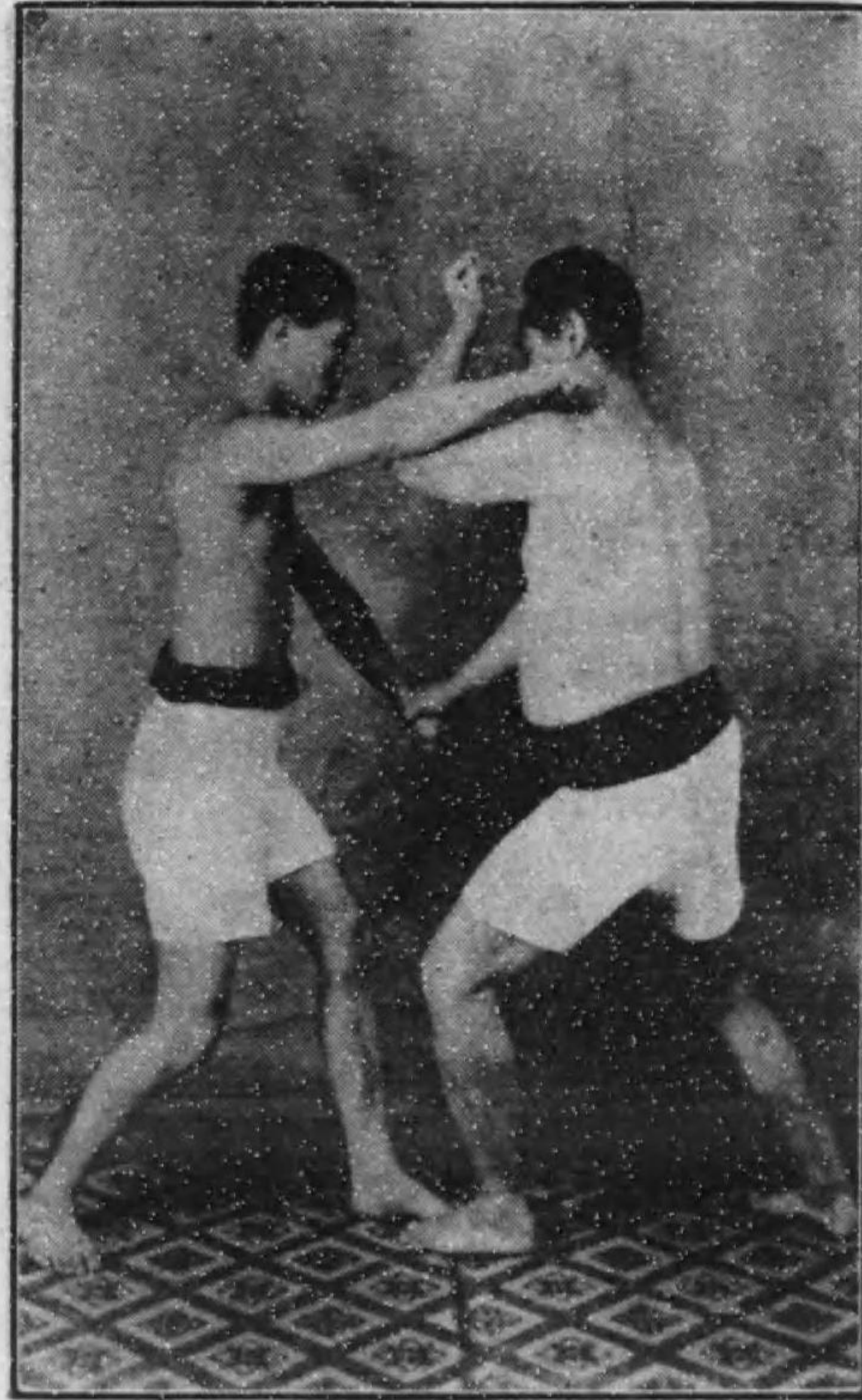
前圖に於て、我右手に

て敵の左拳を打ち外すこ

同時に、我左拳にて敵の

左肘を下より突き挫く。

(三其) 又 圖二十三第



前圖に於て、我左拳に

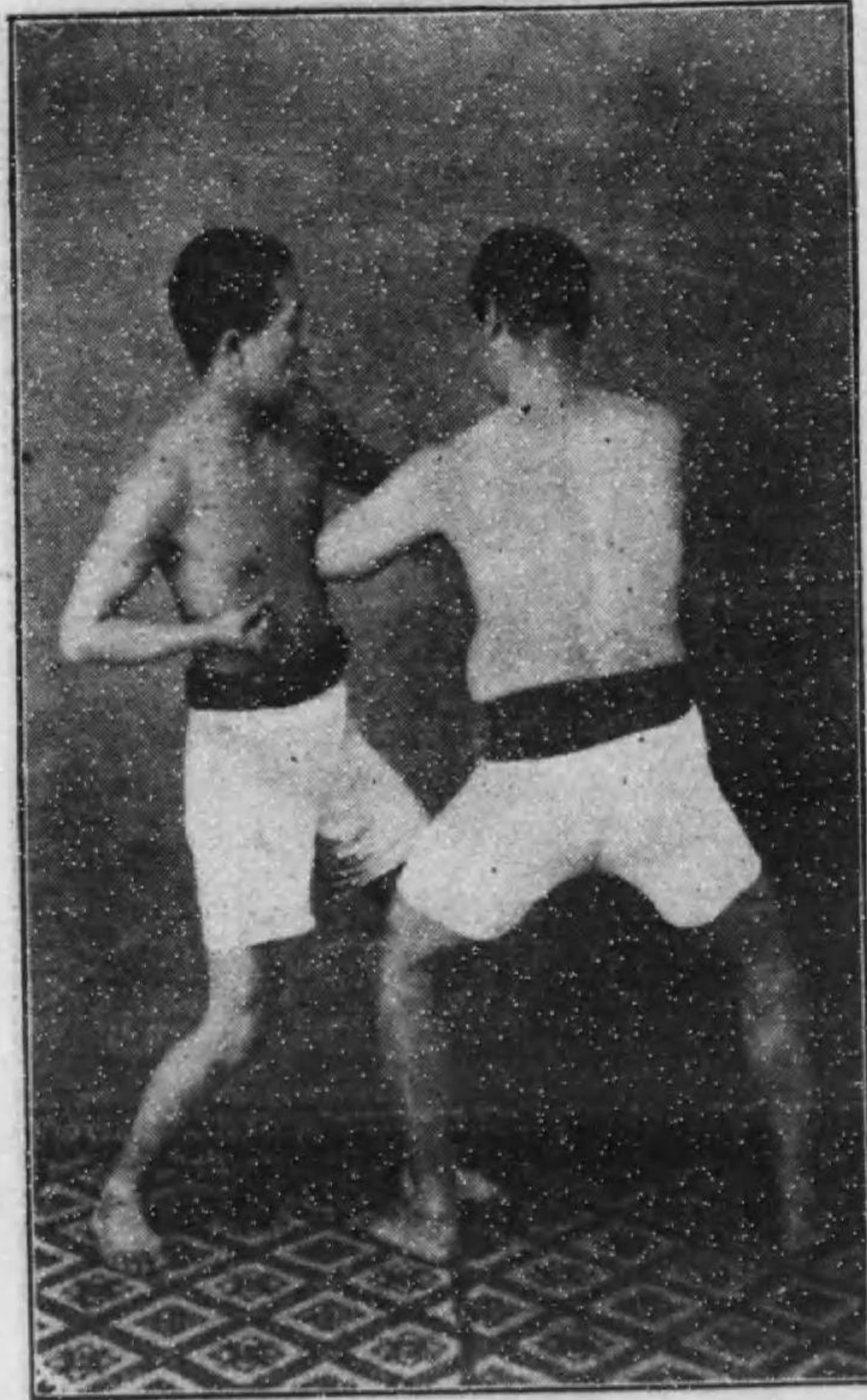
て敵の左肘を突き挫くも  
敵はひるまず右拳にて再

び我顔面へ突き來るを、  
我左手にてこれを受け外

すこ同時に、我右手は敵  
の左手首を引き摺む。



(五其) 又 圖四十三第



前圖に於て、我右手にて敵の左手首を掴み、我左拳にて敵の右拳を受け外す。同時に敵の顔面へ打ち込むを、敵はひるます體を引きこれを避けん。ミするを、我はすかさず左肘にて敵の胸部へ突き込む。

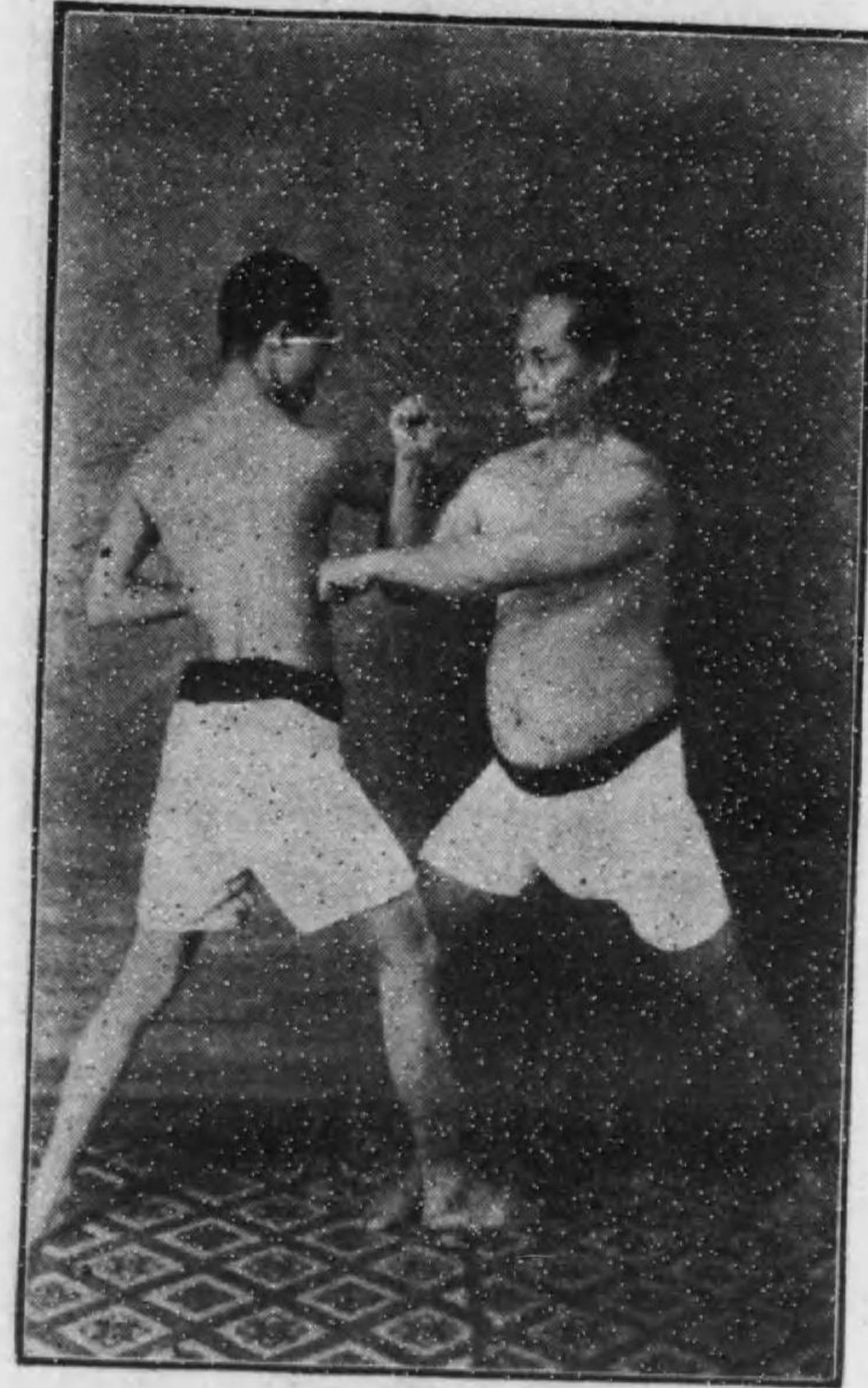
(四其) 又 圖三十三第



前圖に於て、我右手にて敵の左手首を掴み、我左拳にて敵の右拳を受け外す。同時に敵の顔面へ打ち込む。



ル 圖五十三第



雙方接近せし時、敵が右拳にて我顔面へ突き来るを、我右手にて敵の右拳を敵の右肘の所にて打ち外すと同時に、我左拳にて敵の右脇腹へ突き込む。勿論此場合は雙方接近せる爲め、我右は敵の右肘の所を打ち外し得るを以て、我左拳は敵の右脇腹へ打ち込み得るものと知るべし。

ヲ 圖六十三第



敵が後より兩手にて抱きしめるを、我右手にて敵の兩手を強く掴み、同時に左手にて敵の罨を掴む。



## 心得となるべき治療法

唐手は人も知る如く剛術で、試合の時など一度に急所を突いてよく相手に致命傷を負はすことがあり、稽古の時でも（組手の時は）お互ひによく注意してゐても誤つて傷を負はすことが間々ある。だから稽古者は「打ち傷」及び「打撲傷が原因をなして咯血をする時の療法」等心得ておく必要があると思ふから茲に家傳の治療法を詳述して一般の心得に供することとする。

## 蘇生術

唐手術の試合勝負は勿論、稽古中こいへきも過つて或は打ち或は突き其のため氣絶せしむることあり、然しながら諸機關に絶對的の損傷を與へざる限り、此法を施さば必ず蘇生せしむる

ことが出来るのである。

この施術方法は種々あるも比較的効果の顯著なるものを述べんに、先づ、假死者を仰臥せしめ胸腹部の衣帯を解き、胸腹部を兩側に押し開き、兩手を以て數回撫で下ろして空氣を充滿せしめ、然る後頭部を先に起して患者を平座せしめ、我右膝頭を以て患者の脊椎十一節に押し當て左足は跪座し、患者の頭部を前方に垂れざらやう我肩鎖骨前部に支へ、左右の手は臍一寸兩側一寸二分の個所にて指部を組み掌小指側を以て内方及び上方位へ壓を加へ其の瞬間に弛緩せしむ。

蘇生の理由は腸骨動靜脈分歧部、腹腔内臓器及横隔膜に通じ刺戟を與へ心臟の鼓動を促し、以て全身の管能を復活せしむることなるのである、此方法は仰臥せしめたまゝで施すことも出来る場合もある、そして施術の際に必ず誠心誠意神佛の加護を祈り鬼神をも挫く意氣を以



て之に臨まねばならぬ

## 骨折、脱臼治療法

患者を適当な位置において患部の上部を動かさないやうにし施術者の手指及び患部を消毒して筋を弛緩せしめ患部上下の両端を掴んで一方に即ち末梢部へ充分に牽引するに同時に反対の方へ牽引して轉移せる骨片、骨頭（骨折は骨片、脱臼は骨頭）を生理的位置に復するやう直壓を加へ、然して發熱ある場合は濕布して副子副木を要する時これを當て動かさるやう繃帯なし、經過如何により筋其他の強直を防ぐ爲めに適度の摩擦法及他動的若しくは自動的運動を促すことが肝要である。

### (一) 打ち傷（琉語ではウチチ）の療法

山羊の肉を四五斤位を、九年母のスイ氣のある汁でひたし、九年母の汁が肉より五分位上になる程度の分量を煎じて汁が半分ほぎになつた時、火より下し山羊の肉と共に兩三日食するか又は山羊の肉のない土地では四五斤位の鶏の肉を骨も一所に酢で鶏肉がひたる程度にシヨウが一合を混じじてよく煮沸させ汁が半分ほぎになつた時、火よりおろして兩三日食せば屹度治療することが出来る。

尙ほこの酢シヨウがで煮た鶏肉の汁は畢丸を蹴られ腫れあがつた時も二三日食せば屹度治療することが出来るのである。

### (二) 打撲傷が原因となつて咯血する時の療法

四五斤位の家禽を骨も肉も共に諸臼二合でよく揉み、それに水を家禽のひたる程度にいれてよく煮沸させ、これ亦汁が半分位になる迄よく煮て、兩三日家禽の肉もろこも食せばよい。尙



はこの家禽の汁は肺を胃かされた人にも非常に効目のある療薬で肺の悪い人(肺結核の初期位)がこれを毎月、二三回宛か、さす一年ほご食用すれば著しいほご肺を丈夫にし健康を増進して見違へる位、肥わるのである。

(三) 打撲傷が原因となり瘡氣を生じた時の療法

百合の芋を摺鉢に入れて摺小木でよく粉にし、それを酢のきついのと混じて、ユジミチンキ一を塗布する様に患部に塗布する時は三四回にしてよく治療することが出来る。

(四) 打ち傷が発生して困る時の療法

單に酢に豆腐をひたし三、四日毎日續けてその汁と共に食せば屹度いたみを去り全治することが出来る。

(五) 切り傷の療法

蝸牛または「タニシ」を摺鉢に入れて摺小木でよく叩きつぶし、蘇鐵の油と共によく混じて塗る時は直ちに出血を止め立ち所に治療することが出来る。

尙ほ以上述べたる外にも色々治療法はあるけれども漢方醫の用ひる簡単な調劑法を一二録して斯道の研究家の心得に供せんと思ふ、

打撲傷及び瘀血を治療するのに用ゐる鶏鳴酸を酒に浸した大黃五匁に歸尾(トーキの尾部)五分、桃仁(桃の種子)七分と共に粉末をなして煎じて鶏鳴の頃、服藥するもので桃仁は皮を剝いで用ゐるのである。

打撲傷の痛みを止めるのは乳香(一錢)に投藥一匁目、歸尾(トーキ)一匁目、赤芍(赤い芍薬)一匁目、白芷一匁目、川芎一匁目、生の生地一匁目、丹皮(牡丹の皮)一匁目及び甘草一匁目を粉末にして酒に浸し毎服三匁目宛服用か又は蘇木三匁目、紅花(沖繩ではチワダとい



特115

780

ふ)三夕、歸尾三夕目、大黃三夕目をこね又粉末にして温酒に混じ一回に三夕目位つつ服用し  
たり三四日にして全治するこゝが出来るのである。

(注意) 尤もこの調劑法は重に漢方醫の方で用ひる療法であるから何れも藥種は南清より移  
入され大阪では丸善で販賣してゐる。

大正十五年五月二日印刷納本  
大正十五年五月五日發行

發行兼編輯印刷人

(定價金壹圓五拾錢)

本部 朝基

大阪市北區堂島中一丁目六番地

印刷所

堂嶋印刷所

電話北長一〇七七番

大阪市東區淡路町五丁目十番地

發行及發賣所

唐手術普及會

電話本局三一九九番



終